息距編

共拾壹本
八十九

和書
二一五一三號
二一五函
二架
二冊

內務省圖書
第　號
書部　類
函
冊　一　共十

內閣文庫
和
二一五
九三函

內閣文庫
番號 和 11513
冊數 11 （ 1 ）
函號 193 597

国立公文書館
National Archives of Japan

教部省文庫印

息距編序

妖教之毒可謂甚矣其誑惑
人心侵奪人國非從前異端
邪説之比也原夫前世之禍
蓋起於大友義鎮而成於織

内閣文庫

田信長信長後悟其姦欲禁
之而弗果東照宮膺征夷
之任始嚴法禁之台德大
猷二公繼述遺志申明其
制如元和寛永間則戎虜之
來者燔其船殲其徒國人之
曽經詿誤改悔自新者命蹈
耶蘇之像及島原平賊之後
則掃蕩廓清無復有遺育易
種於

神明之土焉自是以降虜艦
望長崎而股栗稱日本人有
三眼者實錄　幕府列辟英
明果斷之所致也　威義二
公謹脩藩屏之職嚴君恪遵
祖宗之訓所以圖修攘報國
家者甚力因考究前世之禍
源輯東照宮以来嚴法禁
遏者録爲一書名曰息距編
實取於孟子息邪說距詖行

之語也遂命昭訓作序昭訓
年幼才薄安堪其任固辭再
三弗獲允許則謹書平日所
見以弁諸卷首矣萬延元年
庚申某月昭訓謹書時年十
有三

凡例

一邪法を厳に禁じ玉ふは天下治乱乃大関係ある所なれは令條を第一とし　英見雄断宇内に卓越したまふを著にこれにつぐに事実を以して夷賊の狡謀を明らかにし　次に排邪諸書を載せて正邪の辯を審らかにし　終りに平賊の書一二を挙けて邪徒を西陲に聚め一挙に殲滅すれは天人合一偶然に非ざるを知らしめんと欲したるが為也

一事数書に載る者各其全文を挙けて煩冗を

いと足ざる事事実の詳ならんことを思ふが
ためなり

一 引用の書異本有りて其文少しく異なりといへども其意の相通ずる者は総て一本に従ひてあながちにしも其異同を注せず

一 家乘野史傳説の誤を載せ或は文字を假借し或は假名文字の違へるをも一切本書に據りて種々（原本ノマヽ）改めざるは其時代を見るに足る者なればなり

一 法令事實を引書を各條に注し排邪以下は書名を始めに掲げて披閲に便ならしむ

一 夷狄の教へ往来せしより強（おおかち）邪教に於て関係なしといへどもこれを考るは當时の大勢を志めし所以也

目錄

巻之一　法令第一　起天正十五年至文政十三年
巻之二　事實第二　起亨祿二年
巻之三　事實第二
巻之四　事實第二
巻之五　事實第二
巻之六　事實第二
巻之七　事實第二
巻之八　事實第二　至文政十二年
巻之九　排邪第三　熊澤伯継説　切支丹物語

巻之十　排邪第三　天文末録
巻之十一　排邪第三　天文末録
巻之十二　排邪第三　三眼餘考
巻之十三　排邪第三　五月雨鈔
巻之十四　排邪第三　破切支丹　破提宇子
巻之十五　排邪第三　排切支丹　對治邪執論
江戸物語　切支丹法器
巻之十六　平賊第四　島原記録
巻之十七　平賊第四　島原記録
巻之十八　平賊第四　島原記録
巻之十九　平賊第四　島原記録
巻之二十　平賊第四　島原記
巻之廿一　平賊第四　島原記
巻之廿二　平賊第五　松平輝綱日記

息距編巻之一

法令第一

一 秀吉公被禁邪宗門長崎御料所被仰付事

天正十五丁亥年秀吉公嶋津為征伐九州ニ發向有シ凱陣の時筑前博多ニ暫ク御逗留有之其頃長崎ノ頭人共博多ニ参上シ御目見ヲ願フ由然ルニ於彼地ニ御老中ニ無禮ヲ成セシ故如何ナル者ゾト御僉議有之處彼者共ハ数年長崎之地ニ南蠻船ヲ相付テ切支丹之邪法ヲ信用シ神社佛寺ヲ破却シ所ノ取捌[illegible][illegible]心儘ニ計フノ旨御

聞ニ達シ甚以不法至極也仍テ右ノ頭人共即刻
追立ラレ伴天連共ハ早々可令歸國旨長崎表ニ
藤堂佐渡守ヲ差シ遣サレ御條目ヲ以テ急度被
仰渡之

定

一日本ハ神國タル處ニ切支丹國ヨリ邪法ヲ授
ケ候儀甚以不可然事

一其國郡ノ者ヲ近付門徒ニナシ神社佛閣ヲ為
打破前代未聞ニ候國郡在所知行等給人ニ被
下候儀ハ當時之事ニ候天下ヨリノ御法度相
守諸事可得其意候處下々トシテ猥成儀曲事
ニ候事

一伴天連其知恵ノ法ヲ以心サシ檀那ヲ持候半
ト被思召候處如右日域ノ佛法ヲ打破候事曲
事ニ候條伴天連之儀日本之地ニハ被差置マ
ジク候間今日ヨリ廿日ノ間ニ用意仕可歸國
候其内下々伴天連ニ不謂儀申掛ル者アラバ
可為曲事候事

一黒舟之儀商賣ノ事ニ候間格別ノ事年月ヲ経
諸事賣買可仕事

一自今以後佛法ノ妨ヲ不成輩ハ高人ノ儀ハ不
及申何ニテモ切支丹國ヨリ往返不苦条可得
其意事

同十六戊子年天正十五年（長崎志）寺澤志摩守藤堂佐渡守両人被差
越長崎御料地ニ被仰付之旨重テ御條目ヲ以被
仰出為御代官鍋島飛騨守ニ長崎御預ケ被置之

定

一當所御料所ニ被仰付候上非分ノ儀有之マシ
キ事

一有様ノ御公物納所申上迄横役不可有之事
　附地子ハ得上意可免之

一當所ノ儀此両人ニ被仰出候間為代官鍋島飛
騨守ニ預ケ置候間何茂可得其意事

一黒船之儀前々ノ如クタルヘク候間地下人令
馳走當所エ可相付事

一自然下トシテ不謂儀申掛候者有之共一切承
引仕間鋪事

右ノ旨相背輩於有之ハ急度両人方エ可申越候
堅ク可申付者也仍而如件

天正十六年五月七日

戸田民部少輔勝陣

浅野弾正少弼長吉

一同年長崎町中地子御免許之御朱印下シ賜ル
是ヨリ毎年長崎町中ヨリ年始之御禮ニ参上
ス

一長崎ニ黒船如先々相着候者可致商賣并當
津地子ノ事被成御免除畢猶浅野弾正少弼
戸田民部少輔可申者也

一天正十六年閏五月十五日　長崎惣町　同上

一條々
伴天連門徒法制禁也若有違背之族者忽不可
遁其科事

慶長十七年　御當家令條

一掟

一切支丹の法ハ死を不顧身より血を出して死する
を成佛と立由へ天下の法度嚴密なり依之死を
何やらする者可遂吟味なり

一切支丹に之付者ハ韃靼國より毎日金七厘をわたる
之天下を切支丹になし神國を妨る邪法なり此宗

に元付者ハ釋迦の法をふ用故檀那寺の檀役を妨め
佛法乃建立を嫌ふ因茲可遂吟味事

一 頭檀那たりとも其宗門の祖師忌盆彼岸先祖の命
日絶て参詣せざんバ判形を引宗旨改ゟ断急度
可遂吟味事

一 切支丹ふ受ふ施ハ先祖此年忌僧の弔を不受當日
宗門寺に一通志を述内證にて俗人一類打寄弔ひ
の僧来る事何る時ハふ與にしてふ用仍ゟ可遂
吟味事

一 檀那役をふ勤志ニも我意に任せ宗門受合の住僧

戒ふ用寺此用事身ふお應ニ不勤内心邪法を
抱たるをふ交ふ抱と云可為心得事

一 不受ふ施の法ハ何すても宗門寺ゟ戒不受
其宗門乃祖師本尊ゟ寺用ふ旅旦又他人他宗
此者をふ交ふ抱是邪法なり人間ハ天の恩を交て
地ヨ抱し親の恩を請て子ヨ施し佛地恩を受
て僧ヨ抱を是正法なり依て可遂吟味事

一 切支丹悲田宗ふ交ふ抱三宗た不一派なり彼ら當
む不のなる喪牛頭切支丹頭佛といふて頭大ら
是となれるなり 此佛戒就奉り鏡を逆ハ佛面を

あり宗旨轉べハ犬と見せる是邪法之鏡あり一度
此鏡を見ゐるものハ涼く牛頭切支丹頭を信仰し
て日本を魔國ふなし抜きたる宗門吟味の神國なれ
一通宗門寺ゟ見付て日比人ふ交り内心ふ交ふ
抱まで宗門寺比出入せし因茲て遂吟味なり

一 親代ゝゟ宗門ゝ見付八宗九宗の内何きの宗
旨ふ紛なきとも其子何の迷ひにて心底邪法ふ組し
居申も難斗宗門寺ゟ遂吟味佛法を勤
免談義講釋を以宗論致させ檀那役をとつて
夫ゝの佛用修理建立勤させへし邪宗ハ宗門

ものなり一切世法世間一通りふして内心佛法を
破り僧の勤を不用族ハ可遂吟味ものなり

一 死後死骸に剃刀をあて戒名授事是宗門寺の
僧死相を見届けやしき邪宗ならぬ段慥に合点の上引
導て致能ゝ可遂吟味なり

一 宗門寺役不参外寺へ出入致し宗門ゟ此住持
を退けやうなり別而致僉議て遂吟味事

一 先祖比佛事他寺へ致持参法事を勤る事堅禁
制然ども他國ふ在ふて死したる者ハ格別之事
毎年盆廻りの儀ハ宗門の寺佛壇吟味として出廻り

可申事

一 天下一統正法ニ紛れ無き者ニハ判形を加え

宗旨請合て申候武士ハ其寺の支状ニ證印を加え指

出其外血判ニ出難きものハ立合を以て證文て指出

事

一 相果候時分一切宗門寺ニ指図請取可申事

一 天下の敵万民の愁無く切支丹不受不施悲田宗ニ

り結候者ハ類族ニ果候後ハ寺社役所ニ而取捨使

を受けて宗門寺ニ住持不及一可申ゟ役所ニこと

召候本ひ申時無く出僧ニて為越度能々可被成

味事

一 横領無諸ニ檀那役其者共ニ限ニ不依の義ハ可

有用捨可信心を以王法を敬ハ正法の者也

右十五ヶ條之趣一義檀那ニ申ハ梵天帝釈四大天

王五道の冥官日本伊勢大神宮八幡大菩薩春

日大明神其外氏神日本六十余州之神明之可

蒙罸者也

慶長十八年

癸丑五月 日

奉行

天下之諸寺院宗門請合之面々此條々一ツも闕ルハ

越度可為候付能々可被相守者也　諸寺文書并浅
草清光寺本郡

官古
記

按するに此令條は諸寺院へ下し玉ふ所なるへき故
まことさらに佛道を引立られ宗門に就て邪法
を撿査せらるゝをむねとなしたまふ故に末此
起請文自餘の誓詞と違ひ梵天帝釋を上り
裁せられたる所を除き　神慮ましませる法なり
と仰きまつるへし

急度申入候仍伴天連之徒に依宗法停止之旨先年
相國様被仰出候上者猶以被得其意下々百姓以下に至迄
彼宗門無之様可被入御念候将又黒船いきりす船之
儀右之宗体に候間諸領分江着岸候共長崎平戸江被
遣之於領内に商賣不仕様可被成候由依　上意如此
候恐惶謹言

元和二年八月八日

安對馬
土大炊
酒備後
本上野
酒雅楽

追而唐船之儀者何方江着船候共船主次第商賣可

仕出候以上　御當家令條

元和二年八月二十日イキリス國之商船長崎入津
制令を下したまふ條々

一イギリスヨリ至日本渡海之商船於平戸可賣買
他所ニハ不許縦雖風濤之難ニ遭云難至本國地モ
不可有異議并諸役免除之事

一船中資財取目録可取寄事

一不可有押買狼籍事

一彼國ノ人若有病死之輩ハ其荷物不可有相違
事

一船中ノ商人於有罪科ハ任其國法可隨其船主
之意事　御當家令條

元和八年八月廿日板倉周防守時代伴天連門徒
法停止尤堅御制禁候處京都其外諸国江法觸有之　柳營秘鑑
京都町中可令觸知條々

一伴天連門徒停止之事

一右此徒黨露顯次第被處死罪者也然者嚴重之制
法候上自然彼門徒町中ニ在之者早速可申出褒
美可有之若隱置他所より顯於申出者其町中可為
同罪事

以前條々所定也町中而能可令觸知者也

元和八年八月廿日　御當家令條

武家諸法度

一耶蘇宗門之儀國々所々彌堅可禁止之事

寛永三年五月廿三日　禁中并公家諸法度

御高札并囑託銀之事

一慶長ノ頃ヨリ大波戸地内ニ御高札場ノ建置ル寛永三年切支丹訴人囑託為銀三百枚被掛之　長崎志

寛永五年五月廿九日肥州長崎吉利支丹宗旨ノ徒罪科ノ事ニツキ水野河内守守信ニ御書付ヲ賜ル

覚

一去年火あぶりニ成候付候伴天連方之のりわたりきの船の船頭并肝煎候者并宿仕候者之事火あぶりニ成申付候右のかゝ死罪たるへし いつれも男子死罪女子娘奴家財闕所にて可仕事

一長崎町人庄吉と申者吉利支丹曲事ニ付詮申来者家下火をつけ手むすひて仕之旨ゐくみ申ニ付召捕拷問候由不申候死罪ニ申付男子同罪女子女子奴

国立公文書館
National Archives of Japan

家財闕所可申付候事

一 伴天連の道具訴り申ものにおゐてハ頭指条々申編
候處ニ山田宗右衛門と申者伴天連の道具かくして
焼捨申候ニ付候而捕置申候死罪ニ申付候男子同
罷女子女子奴家財闕所ニて申付候事

一 吉利支丹ころひ申者之借屋ニきりしたん宗旨
之者置申候故雅山ニこやをかけ置之由候松倉
豊後守領分にて追捕候事

一 長崎町人あんたうにおと申者伴天連隠置候由
訴人有之付ざこつし申候ニ付伴天連ハ居不申たこ家

ひの道具有之所捕置候由当町居之者かくし申
越之由ニ付出方長崎ニ而お越能穿鑿候而搦
子置而申上候事

一 当地之者吉利支丹宗門家財之事家ハ居屋敷
并財宝之者居屋敷ニ半三ヶ所商人ニ申付候事

一 吉利支丹宗旨ころひ不申候者ハ諸役をとく申
付いさみ候様ニ尤之事

寛永五年五月日　水野河内守

御当家令條

覚　九ヶ条之内

一 伴天連之宗旨毎年可改申候事

寛永七年七月十三日　同上

條々

一異國江奉書船之外舟遣候儀堅停止之事

一奉書船之外日本人異國江遣申間敷候若忍候而乗渡る者於有之者其者ハ死罪其船并船主とも留置言上可仕事

一異國江渡住宅仕有之日本人来候ハヽ死罪可申付候但不及是非仕合有之而異國ニ致逗留五年より内ニ罷帰候ハヽ遂穿鑿日本ニ留可申付候ハヽ御免　併異國江又於可立帰者死罪可申付事

一伴天連宗旨有之所江ハ両人中より可遂穿鑿事

一伴天連之訴人褒美之事　上之訴人ニハ銀子百枚其外下ハ随其忠可相計事

一異國船申分有之而江戸江言上之間番船之事　此以前之如く大村方江可申越事

一伴天連之宗旨弘ル南蛮人其外悪名之者有之時ハ如前之大村之籠江可入置事

一伴天連之儀船中之改迄入念可申付事

右可被守此旨也仍執達如件

加賀守　一

丹後守
伊豆守
讃岐守
大炊頭
雅楽頭
御當家令條有
武家諸法度無

寛永十一年五月廿八日
耶蘇宗禁書度
神尾内記度 武家諸法度 御當家令條
寛永十一甲戌年十月六日伴天連蔵宗門穿鑿
抑之右觸書之
寛永十二乙亥年正月吉利支丹宗門之儀新規ニ

改被仰出候有之 柳営秘鑑
寛永十二乙亥年唐船是迄九州諸處ニ往来セシ
所向後長崎湊一方ニ着船シ一切他方ニ渡海御
停止ニ仰付ラル 長崎志
一伴天連并きりしたん宗旨此以前ゟ御制禁ニ候處
于今断絶無之様ニ候少々有之候依之望之法度ニ
仕出候ハヽ銀子被下之穿鑿候得ハ自然右之宗門拵候之
を捕之急度可申上候以上
如此諸國之大名小名ニ年寄共ゟ之を觸之向ニも不
殘右之通御年寄被仰渡候其御心得ゟ御知行不一并被

右件ハ老九能ニ治穿鑿尤ニ候以上

寛永十二年亥九月七日 武家諸法度

寛永十二乙亥年十月切支丹宗門ゟ之起請文
案文を以被仰出候是則島原一揆之弐年前也吉利
死丹の字如此之處切支丹と改る
常憲院殿御諱之字を憚ゟ書改之 柳営秘鑑

寛永十三年子ニ被仰出候條目之写

一異國ニ日本船遣候儀堅く停止之事

一日本人異國へ不可遣若忍候而乗渡之者於有之ハ其者ハ死罪并其船主とも留置可言上事

一異國へ渡住宅仕日本へ来り候ハヽ死罪可被申付事

一切支丹宗門有之所へハ従両人可致遂穿鑿事

一切支丹訴人褒美之事
伴天連之訴人ハ其品ニ寄或ハ銀子三百枚或百枚為取之其外此已前のことく相計可申付事

一異國船申分有之而江戸へ言上之内番船之事如此以前大村江可申越事

一伴天連法弘め候南蛮人其外悪名之者有之時ハ如前之大村之牢ニ可入置事

一伴天連之儀船中之改迄入念可申付事

一南蛮人子孫日本ニ不残置様ニ堅く可申付事
若令違背残置族於有之ハ、其者ハ死罪、一類之者科之軽
重帰可申付事

一南蛮人長崎ニ而持候子并右之子共之内養子ニ仕族
之父母等悉く雖為死罪、身命を助ケ南蛮人へ遣候
間自然彼者之内重而日本へ来歟又ハ書通於有之ハ
本人ハ勿論死罪、親類以下迄随科之軽重可申付事

以上

寛永十三年五月十九日

加賀守

豊後守

伊豆守

讃岐守

大炊頭

榊原飛騨守殿

馬場三郎左衛門殿

崎陽雑記

寛永十四年丑十二月廿七日従上使所掟之
條々

一今度吉利支丹徒党為御誅伐嶋原表ニ発向衆中
面々当人可任指図事

一当人之下知無之ニ抜掛之儀望停止、若猥ニ先駈之

一 対於南蛮之悪物路可為越度事
附喧嘩口論并濫妨狼藉停止之事

一 徒黨何茂為郷人之者縦致物具士之出立之不相替
族雖有之不撰其不可為討捨事 付自然味方討捨
在之者急度可被申付事 可被相守此旨之条如件

石谷十蔵
板倉内膳 御當家令條

寛永十五年

一 むてきんの訴人 銀子百枚
一 いるまんの訴人 同 百枚

一 きりしたんの訴人 同五十枚
一 又ハ三十枚訴人ニよるへし
一 右訴人致候者ハ縦同宿之内たりといふとも宗旨ころひ
申出ニおゐてハ其咎をゆるし此褒美如此書付可被
下旨被仰出者也

寛永十五年九月十二日 同上

寛永十五戊寅歳太田備中守被 台命長崎到着
有之此度南蛮人渡来儀一切御制禁被 仰出付
留蛮人共一人不残帰國可致向後急度日本再渡
致間敷旨厳敷被 仰渡最天正中邪宗門厳御制

禁商賣一向渡事御免處其後兎角邪宗門餘類不
断有之此度既一揆事有之於尚又嚴數被　仰付
旨申渡　通瓊浦

寛永十六年七月五日被　仰出

條々

一日本國ニ来法制禁之吉利支丹宗門之儀乍存其
趣彼法弘ル者于今密々差渡之事

一宗門之族結徒黨企邪儀則誅罰之事

一伴天連同宗旨之者隠居所ゟ彼國續(ツケ)物送與之事

一右依之自今以後彼比渡海之儀停止畢此上若
於指渡ハ者其船を破却并乗来者悉可處斬刑所
被仰出依執達如件

寛永十六年七月五日

對馬守
豊後守
伊豆守
加賀守
讃岐守
大炊頭
掃部頭

一
條々

一吉利支丹宗門雖為御制禁其以從彼國密々伴天
連を差渡ニ付而ハ其度かれうた船差岸ニ着停止之
事

一領内浦々ニ小屋を構有る者ヲ付置不審有之舟来ニ
於てハ念入可相改之自然異国船差岸之時ハ従先
年如御定早船中之人数ヲ改陸地ヘ不上して早速長
崎へ可送遣之事

一自然不審成者舟ニ乗せ来り又ハ密々ニ其船中ノ物を
陸へ上る輩有之ハ可申出隠訴人之事ニ急度御褒
美可被下之旨兼而触を以る [illegible] 於てハ其約束之

一倍可被下之事

右條々不被仰出也依執達如件

寛永十六年七月五日

對馬

豊後

伊豆

寛明日記
御當家令條

條々

一きりしたん宗門雖為御制禁其以從彼國密々伴天
連を依指渡かれうた船差岸ニ依御停止之事

一領内浦々ニ小屋を構成者を付置不審有之船来小
於てハ入念可改之自然異國船逢風波ニ雖令差

船共早破船中之人数ニ上陸地より警固付置則
可注進事
一不審成ものを弁り宗来又ハ船中之者
を陸に上り其隠置は可申出之隠訴人之高下急度
御褒美可被下之由兼以属託於令頼者其約束之一
倍可被下之事

右條々不被仰出也依執達如件

寛永十六年卯七月廿二日

對馬守
豊後守
伊豆守

武家諸法度

定

一吉利支丹之事 罪科依為重畳宗来族被停止
之訖 然ル上ハ自今以後彼國之輩唐船にのせ来る
に於てハ其身之事ハ不及沙汰船中之者悉可為死
罪也 縦同船之内たりと云ふとも申出るに付而罪科をゆ
るし御褒美可被下之事
一吉利支丹書状并ことつて物もち来る為其自
筋者有之族あらバ急ニ可申上於隠置者其科可為
同前之事
一属託を出し吉利支丹の族唐船よりのり来る事於有之

八早〻可申上〻其科をなくし為御褒美其属

託〻一倍て〻下〻る

右可相守此旨者也仍執達如件

排るに此令條本書年月なしといへとも寛永十七（天文末録）

年の令なる尓し仍而姑く此所に志るす

覚

一きりしたん宗門之事累年御制禁たりといへとも此

度も方々より改出し作自然不審成者有之ば可申出

一然ハ伴て連ハ銀弐百枚いるまんハ同百枚同宿其

外宗門之族ハ或五拾枚或三十枚為褒美として

又ハ下〻隠置他所よりあらハるゝ所ハ其五人組迄曲

事可行者也

午十二月日（武家諸法度）

是亦年号なし寛永十九年歟

寛永二十年未五月十二日ニ筑前ちめ大島ニ船一艘

漕来ル宗徒人十人陸へ揚水を乞者ともゝ其形さゝやきを

剃衣装なとも日本のごとく然とも眼ざし遠鼻高く異

風ニ見ゆる大島のものともあやしみて番人ニ是を知らせける

早速可捕といふ處ニ船ニ乗宗徒風ニて走りゆくを地の島

といふ所ニて捕之城下へ連来松平右衛門佐方か長崎へ被

右渡奉行山崎権八郎并遂吟味之處南蛮の出家法
を弘之爲日本人之形を学ひ右渡之由申出るさつそく江戸へ
注進致し候處則可罷越由并仰付通詞西吉兵衛名村
八左衛門以沖庵并右添江戸へ罷越於彼地吟味之上南
蛮人之邪宗門を捨故小日向に籠舎并 仰付此时諸国へ
書状廻状出る如左

乙度筑前大島へ従異国伴天連四人いるまん壱人
同宿右渡候處松平右衛門佐書之者右改捕候條右衛門佐
長崎奉行山崎権八郎方へ追て注進候處入念候故
小船を以密々渡り候處さつそく見出搦捕之儀誠殊勝
之候事ニ候就ハ先年被 仰出候諸領内海上見渡候処ニ
断遣之者番所無油断穿鑿一ヶ所可有之上言候
此由可申達候恐惶謹言

五月廿九日　阿部対馬守

松平伊豆守

九州船付大名中宛所不有之　長崎志 崎陽雜記

正保元年

一 吉利支丹宗門之儀前廣申觸候通密々可申付候
江戸中ニ有之候町人乞食等迄も不審成者ハ念を入改
免可申事

寛永廿一年正月日　上方御代官中へ
関東御代官中
武家諸法度

異國船番所之事

覚

一九州中國筋ハ異國船渡海之砌、仰付候旨を守、伴天連
等一切不相渡候、然共バ伴天連いるまん已下奥州筋へ
渡海船を捕置候、きりしたん宗門之者於在之ハ上嶋先
年如之、仰付候領内海上見渡候處ニ番之者被付置、異
國船渡来候者急其隠相止て念入候、彼船来候時ハ仕
置之様子ハ先前如之、仰付可被申付候

右之通堅私可相違之旨依　上意如件以上

七月　井上筑後守　郡官古記

慶安四年

一松平千代無代替之時此條目之内　今按ズルニ毛利大膳大夫綱廣ナリ

一切支丹宗門之義ハ先前御法度之如く制禁弥相守可
申付事

一今按ズルニ武家厳制録の記ス所承應二年二月
十八日上杉喜平次代替、明暦元年十二月九日
有馬松千代代替の時此如き、皆此條目を載て凡
諸侯際皆かくのごとく其箇條按挙ズルニいと多けれ

らざれバ今此等一を挙て以其餘を例する者也

明暦二年申二月五日

吉利支丹宿之事　十二ヶ条之内

一宗旨之義請人を無能々致吟味請状にも出入させ寺
請状をも取無證跡不拾合入者宿ニ無咎ハ可令赦免

一請人ニ無拠し家主不念之條有之ハ拾借宿主勿
論請人可為同罪事

一五人組之内組中へ他所ゟ来宿ヲ借ハ其者一
宗旨之改可仕之處家主致不念宿借ハ其者穿
鑿指出ハ五人組者勿論可為籠舎事

一請人之内家主并五人組宗旨之改念を入請人手
前を能致吟味ハ上ニ請人者人之科ニ可相究事

年号月日　隼人

丹波

右與力中江　御當家令條

長崎表制札

定　櫻町

一伴天連入満總一向切支丹宗門之者隠居屋ある
ざる事

一異國住宅之日本人等於拾海船者かくし置べからざ

る事

一 人賣買停止たり但年季之者ハ拾箇年を限るへし

一 請人無之者ハ家を賣并宿申も可らざるへし

附 主人之所を背き来者抱置可らざる事

一 武士之面々異國人之所より直ニ買物停止たるへし

一 異國人之物買為銀子遣之いたすべからさるへし

右之条々違犯之輩於在之者可處嚴科者也

辰九月　　喜右衛門

　　　　　與右衛門　天文末録

一 今按するに辰九月ハ承應元年壬辰なるへし與右衛門ハ黒川氏にて喜右衛門ハ甲斐荘氏なるへし當時の長崎奉行なり

定

一 伴天連之訴人申出るに於てハ其輕重に隨ひ或銀子三百枚或弐百枚可被下之事

一 入満并同宿其外切支丹宗門訴人申出るに於てハ其忠ニ志たかひ銀子可被下之事

附 伴天連入満同宿たりといふとも訴人仕るに於てハ罪免其科法褒美可被下之事

一 日本に隱居する伴天連并切支丹宗門之輩異國より

一 つゞけものゝ者次いさすものゝ在之ハ申来る届し
其科をゆるし或銀子三百枚或弐百枚可被下
之事

右之旨於申出者急度注褒美可被下者也

辰九月　與兵衛

喜右衛門　上同

一 禁制

一 伴天連宗渡日本事

一 日本之武具持渡異國事

一 日本之人令渡異國事

一 右條々於在違犯之族者速可被處罪科之旨依
仰下知如件

明暦四年五月三日　萬治元年也

奉行　上同

國々所々ニ被立之制札

定

吉利支丹宗門之儀累年依制禁有之と云へとも猶以防
隠あるく急度可相改之旨不被仰出也自然不審なる者有在之
ハ可申出之此以前ハ伴天連之訴人ニ銀弐百枚
いるまんは百枚雖為被下自今以後ハ

一 伴天連之訴人銀三百枚

一いるまんの訴人　銀弐百枚
同宿并宗門之訴人　銀五十枚　又ハ三十枚　品による
べき也
右之通御褒美として可被下之旨御触有之並他所より
あらわるゝに於ては其所之名主并五人組迄可被行曲事之
旨依御当所中江下知如件
万治元年八月　御当家令条　天文末録
万治二年
一松平伊豆守綱信　被申渡候ハ去ル日於評定所諸大名
家来吉利支丹宗門之義此書付之通申渡候三卿江
も不残申上候様ニ諸大名家来中渡置候此書付被進上候
書付之写
一切死丹宗門之儀ニ付而以密訴ニ而も其之者家中之者中
間小者ニ至まて無油断可被申付候勿論奉公人
出替之刻之請人ニ念を入宗旨相改可被相極候
一百姓町人ハ五人組旦那寺を相改不審成宗旨於有
之ハ可被遂詮議候
一切死丹法制禁之高札明暦元年八月相立候経年
序文字相見兼候者新敷書出直可被立之候
以上

亥六月廿三日　同上

吉利支丹宗門法制禁之高札前々より其断絶無
之様ニ立替可申事

万治四年正月日　寛文元年ナリ

寛文元年　武家諸法度

一吉里支丹宗門法制禁之高札此度年号改元ニ付
書直シ可被相立之事

一切死丹宗門之者在之以前之如く急度念入可遂捕来候
何方ニ而も雖為家中并領内弥
入念相改之不審成者於有之者可有穿鑿事

一町人百姓五人組を定庄屋町年寄等油断なく改候
様ニ堅可被申付候自然他所より取捕之
其所之庄屋町年寄并手前遂穿鑿油断仕候於
改出者随科之軽重可為曲事之事

以上

寛文元年辛丑七月四日　武家諸法度　御当家令條

寛文三年五月廿三日被仰渡二十一ヶ条ノ内

一耶蘇宗門之儀於国々所々弥堅可禁止之事　同上

覚

一耶蘇宗門雖為御制禁密々弘之候者于今相見干今

一 当時猶之条向後も遂穿鑿候役人を定置無油
断家中并領内改之不審成者無之様ニ堅可申付候
此上吉利支丹宗門領内ニ有之を他より顕ニおゐてハ
一の為不念事

一 切支丹宗門之者不ニ有之義在名主五人組可存之所隠
此已前高札ニ書載候旨趣令違背常々出候已来穿
鑿ニ於而ハ穿鑿之上可為常出候而可有之罪科
之旨兼て申渡之無油断相改候様可申付事

一 きりしたん宗門之者年頭転き者共露顕法を弘め候
一 きりしたんハ不出之すゝめを致候類之者ハ深隠置

之候者入精遂穿鑿捕候様ニ急度可申付事
附耶蘇宗門訴人之輩無隠此已前相定之通り
相褒美可被下事

一 以上 御当家令条本藩向山常福寺所蔵の本今ニ見ゆる所字句の少稍異同あれとも大義の拘はる所にあらさる故これを注せす

口上覚

一 切支丹穿鑿之儀一万石已上之面々ニも右之度如此被仰出候
役人を定家中領内毎年無油断可被相改事

一 九千石已下之面々も役人定候儀可為難成候家中之
者ハ不及申知行所名主年寄百姓迄細ニ致吟味右之度出付
之通申含之其上毎年五人組手形を取置何時ニても候

従公儀御頼ニ而其手形を出し候様其所之支配
方へ〔合〕入念急度可被申渡事

一 此已前切支丹ニてころび有之者ハ書記し北条安房守
保田若狭守へ可相達事

一 寺社領門前之町并其住持神主分妻子迄遂穿鑿候
様従寺社奉行不念急度可申付事

一 切支丹御制禁高札之儀文字見え兼候ハ書直し
可被相立事

以上

寛文四年十一月廿五日 同上

一 諸大名留主居役を阿部豊後守宅へ呼申渡候ハ並ニ
きりしたん御改之儀出候処方ニ不きりしたん不残
由尚又此度ら仰出候間申達書付相渡さる尤尾紀常
三家之方ニ而ハ豊後守於御城中三家之御傳付江
申候ハ右之切支丹之儀諸大名留主居共へ豊後守宅ニ而
書付相渡候間各ニも御傳ニ相渡候間可申そわたさる 光被 盛典

一 諸國巡見國廻衆へ之仰渡覚
并 同時浦々巡見使同断

一 きりしたん宗門之仕置之儀各無油断申付候
并盗賊等之仕置之儀（浦々ハ海賊）の者存知候様相改候之抱

子てら承之事

一 寛文七年未閏二月十八日 御當家令條

一 寛文十一年

覚

一 一季居出替之時分たるへく宗門之義入念改之耶蘇宗門之者無之旨請人を立可召抱事

一 耶蘇宗門之儀於有之は不寄誰捕来候者不審成者不審之族面々領内之者無油断入念可申付事

一 領中 被相改之不審成者於有之は耶蘇宗門隠置他所へ行方不知者於ては其所五人組可為曲事

右手形を取置之毎年改之旨趣具ニ記書改之保田若狭守青木遠江守ニ可差渡之此外改之支配人有之面々も改之書付取之支配方を可差上之候

一 支配人右組中書付取置之何茂若遠江守へ右証一残置き若狭守遠江守へ可被渡之事

附 耶蘇宗門御制禁之高札歴年席文字見之ニ如ら不揃之者新敷可被立置事

寛文十一年二月 同上

一 吉利支丹宗門改無断絶様ニ今迄之仕来候通改可ら申候

但毎年為渡宛手形在之由也

一 寛文十一亥八月 郡官古記

定

きりしたん宗門之儀累年御制禁たりといへとも弥以
油断なく急度可相改自然不審成者有之ハ可申出
褒美として

一 伴天連之訴人　　銀五百枚

一 いるまんの訴人　　銀三百枚

一 同宿并宗門之訴人　　銀五拾枚又ハ百枚可被下之

右之通可被下之若隠置他所より顕におゐてハ其所之五人組

迄可為曲事旨堅被 仰出也仍下知状如件

延寳二年二月 日

延寳五巳年二月廿五日

阿蘭陀ニハ法代ニ日本商売可仕旨被 仰付之毎
年長崎江着岸ニ付已前より如此被 仰付し異南蛮

一 ニ切支丹宗門通用躰仕候ニ付ず荒入混之由ニ付彼
の国より者相渡とも日本渡海可為停止之旨彼
宗門より日本へ通候ハ一切仕間敷ハ勿論宗門之者
船ニ此世来候事

一 右者日本商売として渡海仕度存候ハ切

内閣文庫

国立公文書館 National Archives of Japan

一 支丹宗門之義ニ付而被申合不熟義於有之ハ可申上
之南蛮人宗門之義ニ付而新規ニ手ニ入候所ニ有之ハ渡
海之道筋之義も可存候者見及申及候ハ長崎奉行
人迄可申上事

一 日本渡海之唐船而可奪もの之おらんた往来之国之内
奥南蛮人之義通用仕候者出合之国有之ハ
其国之名を異書付之毎年差岸之かぴたん長崎
奉行人ニ可差上事

附 琉球国ハ日本之ふ国ニ候間何方ニ而も見合候
者奪ニ不申事

以上御觸抜書

一 延寶八年 嚴有公薨

一 青木遠江守宅ヘ諸国之者招之申渡覚

切死丹宗門改之義前之通年々證文被指出候処当
年ゟハ毎年四月ゟ十二月（十二月ニ一本作十一月）迄之内宗門改之證文
可被差出候添ハ会改可申合候老中ゟ御渡候由申渡之

延寶九年酉二月廿九日（天和元年ナリ）御當家令條

一 諸三人方（家三）諸附ハ渡辺大隅守ゟ申渡候吉利支丹
宗門前方ゟ隔年ニ改ニ付去年ゟ諸代替改候而御
付候面々之義如何可仕与伺之不申不自今以後ゟ毎年
月切之改可申之旨被仰出候 并 京大坂堺船人也食之

肉ニも吉利支丹交り候義も可有之候間吟味仕可相捨と云
仰含候間右三人方ニ城下非人乞食之肉等ニ改可申
仰付候刑部殿播磨殿ニも右同前ニ可申達候旨申候
延宝九辛酉年三月八日 天和元年十月 同上

天和二年

定

一切支丹宗門之儀累年御制禁たりといへとも自然
審成者有之ハ可申出候御褒美として

一はてれんの訴人 銀五百枚

一いるまんの訴人 銀三百枚

一立かへり者の訴人 右同断

一同宿并宗門の訴人 銀百枚

右之通可被下之たとひ同宿宗門之内たりといふとも訴
人に出る品により銀五百枚可被下之候隠置他所より顕るゝ於てハ
其所之名主并五人組一類迄可被行厳科者也

仍下知状如件

天和二年五月廿九日 同上

貞享元年

阿蘭陀人ニ暇ニ付於大広間列坐大目附阿蘭
陀人へ以通詞を 仰渡候ニ條目諸家令條ニ見え

之り前ニ載候所の延寶五巳年二月廿五日阿蘭
陀人江被仰渡候文と全同しくして先年ある所之東
京日本渡海之唐船之内奪取之阿蘭陀法事之国之
之内奥南蛮人ニ出合候國ニ有之候ハ弥南蛮人通用
仕候とも限と一句を添へるのミなれハ略して載せる

貞享四丁卯年　六月廿三日切支丹ニ改出定書出前附一
紙證文從先年被仰出候法法度書と越るか候被書載
在るハ右ニ被仰出候義在也　法代之の法法令書ハ繁多
之して在略之

柳營秘鑑

一　覺

一　前々之切死丹宗門之出るる本人ニ者ニ於ては何年已前何
方ニて奉承仕候ても何年以前ころひ候邪宗門之者ニ
而候共切支丹を訴人仕候ハヽ先科を成可免之
所ハ後居之而所ハ其わけ委細書付可差出事

一　右ころひ候者ニ切死丹之者之ハ惟之之も顕之者之
者共又ハ何事も面之職を仕而候共其訳之人別宗門之
委細書付可差出事

一　宗門切死丹之而ころひ候者之前之子ハ男女共ニ本
人同前之義ニ候而本人之内ハ書入可差出候但ころ
ひ候已後之子共ハ男女ともニ類族之内ハ書入て可差出事

一 前々切支丹ころび候とも其檀那より可為之候、何宗旨ニ
成候而も常ニ寺へ参詣仕候哉、寺へ附届並仏事仕候哉、
殊数をも持、父母之忌日ニ寺へも参り、又ハ持仏なとをも
かまへ香花をも備へ候哉、其趣檀那寺隨ニ遂僉議、又ハ
下人等とも召仕候者有之候ハゝ是又右之趣を念入可被致
穿鑿候事

一 切支丹之儀ハ不及申、宗旨疑敷者於有之ハ御代官
御代官私領ハ其地頭へ可申出候、勿論切支丹宗門早々
可申出候、若隠置候ハゝ本人尤雖為同類其科を
遁るへし、何事をも不申抱置可申付候ハゝ家主迄越度日於

顕ニ付可為曲事事

一 類族之者忌掛候親類并聟舅吟味致し右書付可被
申候、此外ハ不及書付、尤親類等之他国へ差越候儀無之
可為無用、但参候ハで不叶訳有之ハ於テハ切支丹子
孫之わけ参候而ハ一切申届候、代官私領ハ其
地頭へ可申達候、何年己前其訳切支丹ニ成候共申達
候節右書面を以可仕候事

一 毎々切支丹宗門之者果候ハゝ死骸ハ塩詰ニ仕指出、切
支丹奉行指図次第ニ仕候事

一 類族之者果候ハゝ死骸ハ遂吟味、於別条無之ハ其地ニ

一　ニ而茂其趣を帳面ニ記し毎年七月十二月両度
切支丹奉行へ指出帳面除七可申事
右之趣早速相改帳面ニ記之切支丹奉行へ可令指出候
ニ奥書等之義ハ従奉行中可相達候得共今切支
丹宗門之者無之方ニも為心得相触候間可存其意候
以上
卯六月日　貞享四年
御當家令條
改之證文案
一　切支丹宗門従前々御禁制ニ候条今以相改申候先年も
従公儀御法度書之趣承知仕相守私領分中者不及申ニ
至而近遂穿鑿家中之者下々迄毛頭疑敷
不審成者無御座候事
一　右切支丹轉候者并類族之者之跡疑敷キ義
無御座候
一　領中寺社家中之者下々ニ至まて遂穿鑿
以後不審成者於有之者可申達候
以上
年号月日　名　字判
書判
中山丹波守殿
戸田又兵衛殿

一寛永二丑四月従　公儀被　仰出候切支丹馬轄連
耶蘇宗門之儀堅御停止ニ付諸寺院檀那之者門
前召抱候迄急度可遂吟味若不審成者外ゟ訴
人出候時ハ急度可為曲事事

一檀那寺之義滅罪是迄之通ニ候ハ無之従　公儀御法
度之邪宗門為御改也依之可為役寺者也其檀那
血脈相續之義急度御改可申候別而於遠國切支
丹宗門之類於　公儀厳對有之当六月諸国之地頭
國主并官領新御條目御觸出し可在承知厳敷檀
那之者ハ御渡此上ニも怪敷隠密之義仕候族有之急
度御改宗旨御役所江御斷可申事

一切支丹馬轄連不受不施耶蘇宗門四通り宗門之外
邪法修行仕候ハゝ急度御改法御定之通御法役
所ゟ御許可申事

貞享四年卯十月　奉行

諸寺文書

貞享四年

禁制

肥前國長崎

一伴天連日本江乗渡事

一日本之武具異國江持渡ル事

一日本之人異國江渡海之事

一附日本住宅之異國人同前之事
一有之條々於違犯之族者速可被處嚴科者也仍
而下知如件

貞享四年十二月　奉行

天文末録　長崎志〇
天文末録明暦四年五月三日條載て
附日本住宅之異国人同前の事此
條あり

諭唐船諸人

一耶蘇邪徒（蠻俗曰天主教）以罪惡深重故其駕舶所来者
先年悉皆斬戮且其徒自阿媽港發船渡海之事
既停止之自今以後唐船若載彼徒来則速斬其
身而同船者亦當伏誅但縱雖同船者告而不匿
則赦之可襃賞事

一耶蘇邪徒之書札并贈寄之物潜藏齎来於日本
則必須誅之若有違犯而来者速可告訴焉猶有
匿而不言者其罪同前條事

一以重賄密載耶蘇之徒于船底而来則即速可告
之然則宥其咎且其賞賜可倍於彼重賄事

右所定三章如此唐船諸商客皆宜承知必勿
違失

貞享四年十二月

同上の天文末録年号月日とのミあり
一書ニ云延宝八年八月日

一御番所御高札

條々

一遠見番入念阿蘭陀船入津飯帆之節早速注進
可仕事
一異形之船於見候ハゝ阿蘭陀同前注進可仕事
一前之遠見番并油断於守之若不審成船見出候ハゝ
即刻長崎へ致注進庄屋不寄も其趣を為申渡
上ニ而飛出シ浮見届之重而注進可仕事
一唐船入津飯帆共ニ日本船唐船ニ至迄見候ハゝ早速番
付於致不審成不拾置之其右之船若為長崎へ可致
注進事
一附唐船入津飯帆共ニ繋船之義ハ時を不定被遣

り可仕事
右之條之堅く可相守之若違犯之者於有之ハ可為
曲事者也
元禄元辰年十一月　同上

御高札
定
出嶋町
日本人異國人法度之背き不依何事悪事をたく
み禮物を出し頼候とも五之急度申出候ハゝ雖同
類其罪をゆるし其禮物之一倍御褒美可
下候間不依何事訴人於有之ハ可為罪科者也

卯十月日　出島町

禁制

一 傾城之外女人入事

一 出島廻り榜示木杭之内船乗廻事

　附 橋之下船乗通事

一 断なくして阿蘭陀人出島より外に出る事

右之條々堅可相守者也

卯十月

榜示木出島南方堀外海中ニ有之浅岸内江一切

船不可乗入者也　長崎 志

定

きりしたん宗門ハ累年御制禁たり自然不審成者

これあらは申出へし御褒美として

伴天連之訴人　銀五百枚

いるまんの訴人　同三百枚

立かへり者之訴人　同断

同宿并宗門之訴人　同百枚

右之通下さるへし たとひ同宿宗門之内たりといふとも

申出る品により銀五百枚下さるへし 隠し置他所よりあらはるゝ

顕るゝニ於てハ其所の名主并五人組迄一類共ニ可行

罪科者也

正徳元年五月日　奉行

定　御當家令條

一伴天連入満惣而切支丹宗門之族不可隠置事

一異國住宅之日本人於帰朝者不可隠置事

一人賣買停止之但年季之者ハ拾ヶ年ニ可限事

一請人無之者家を賣并宿借座敷かさざる事

附り主人前背き来者不可抱置事

一武士之面々異國人手前より直ニ買物停止之事

一異國人之物を買取銀子遅々不可致事

右之條々違犯之輩於有之者可為處厳科者也

卯十月日　備後

加賀

十月長崎より三ヶ条之御書出ありし耶蘇之来るをあらかじめふせぎ為也

條々

一伴天連并切支丹宗門之族異國より日本江渡海之沙汰有之来舟之内自然於不審之渡海儀で有之事

一先年異國江渡候南蛮人子孫伴天連ニ可仕立為有之由ニ候已前渡海之伴天連之中にも余程漸伴天

連まず可成ニ令日本船を作り日本人の姿をまなひ日
本之詞をまなひ右渡り候義可有之ニ付
一 異國船近来四季共ニ渡海自由ならしむ浦々之義ハ
不及申其外何方ニ而も其まて常ニ無油断心を付見出
乗出し申達し 捕ひ彼宗門のものと云共於申出ハ其
咎を免し尚褒美之上宗渡船荷物共可被下之
若一隠し居後日ニ顕ハ連又ハ同類之者等捕之拷問
之上ハ其隠置不可有之候得共申出之者隠置之義ハ不及
申其一類又ハ其所之より一在所之者迄急度可被曲
事

右之條々海上見渡所之書之者ハ勿論猟船之者其外
之者迄無念を入見出し 乗出し 奉行所迄可
申出者也仍而下知如件

卯十月日　　　　　　　但馬

　　　　　　　　　　　加賀

一 右按るに右之令條新井筑後守乃建議より出し
なるべし

正徳元辛卯年去ル延寳八年被建置之切支丹訴人
囑託銀之御高札并毒薬似薬種御制禁等之御高
札共ニ文言御書改之二串外ニ新規之御高札二串共ニ

被建置之　長崎志

享保中被　仰出候御書附

一 類族之者只今迄ハ追放ニハ不被申付候得共追放申付候而も不苦事

一 離別又ハ養子之儀ニ付類族を離候者ハ二季ニ改判證文ヲ以て相届候、変死死罪欠落遁世之者ハ二季改判之書附ヲ以て相届可申

右之通向後ても相心得可申候

申　十一月

先達而相届置候類族追放候得之者二季改判證文ニ而相届来候之筈ニ候　四月廿七日

覚

一 切支丹本人同前之内出家ハ為格別宗旨向相果候共不及伺證文ニ不仕土葬ニ而火葬ニ而取持手次第取置候様二季届之節可申出候

一 本人并本人同前之者之出家之外ハ只今迄之通證諸之仕伺之上可任指図候事

一 類族之儀只今迄之通ニ而無之候事

戌閏五月

郡官古記

一 切支丹蜂起之後例年十一月迄之内奉行所ニ而諸

大名分両判之證文指出之其外一紙證文ト云
切支丹宗門従前之無怠依以御改被仰付先年
仰出候法度之趣家中并領内寺社に至迄遂
穿鑿候處不審成者無之候依之百姓等迄寺
證文請取家中之面々は已後疑敷者於有之ハ早速可申出候
為其仍如件

年号何年何月　　姓名　印判

何某殿

宗旨證文と

大概右之通程村紙ニ認上包美濃紙折懸ケ
認其下ニ姓名記之宗門改之奉行に指出之

一類族之生死嫁娶養子改宗剃髪等之儀二季毎之
追放も已来不苦趣ニ而其又毎月ニ而御届本人同ハ
何事も其時之年行之指図ニまかす尚申度毎書
出之本人同前之者男女達ハ其子孫玄孫末孫迄類
族ニ成本人より都合六代也七代目ニ本人ニ而存其
故男系と云其外本人同前之忌掛り之もの不残類
族也本人之聟舅ハ忌服無之といへとも類族ニ而
類同上

一大目附　三千石高　五人

右者萬石以上之面々に諸觸流シ諸大名急病等

之節判元見届諸國驛宿船渡シ人改切支丹宗門
服忌分限帳等ノ改江戸近邊鐵炮改日記指物等
迄當職ニテ改之 官中秘策

切支丹宗門改之事

一 例年七月ゟ十一月迄之内寺社奉行諸大名ゟ壱判
之證文指出候是ハ一紙證文とて其支類族之生死嫁
娵養子改宗剃髪等之儀二季ニ届也近頃ハ近年
不苦趣ニ而是又届不ても當人同者何事も無之
之候而奉行中指図之上甚通り付候段当座届出
之本人同然之者男ならバ其子孫玄孫末孫迄類族之
若類本人よりハ組合六代七代目平人ニ成是故男系
といふも本人同様忌懸り之者ハ不残類族也本
人之舅姆ハ忌掛無之といへとも類族ニ而有る此宗門
法代々堅く御制禁ニ而毎度被仰出有之所謂 柳営秘鑑

一 邪宗門訴人有之事

領内ニ而邪宗門有之由他領ゟ申来候ハヾ其訴人
急度指留當人を召付置尤此方之在所代官庄屋等
より在所領主之家老迄も付届仕可申候扨又領内邪
宗と申之出候共二倍より三倍ゟ縁者迄も宗門改免候
五人組迄急度穿鑿申付番人数人付置執出候ハヾ訴人之

老江書を以使者江戸宗門奉行ゟ老中江も成程
急ニ云上可仕候 西國方ハ長崎奉行ゟ別而是ハ使者
申出候僉議之仕様彼方ニ而被仰付候私領之者ニても
此義ハ不定ニ而不知僉議申候ハ無用ニ而不知流束ニ而可致
候随分念を入吟味致候事肝要也訴人之老左衛門ゟ定
之度ニ申とも御指図無之内ハ留置返し申間敷候
一右之其老且那之住持江も書を付置申候
家来之者ニ而も宗門疑敷候由申来候老是ハ其
由来り候者急度留置可申趣ヲ其所之名主五人組家主
抔ハ庄屋まても是之申候御指図無之内留置申間敷

此方之老共遂吟味致侍共ニ候得ハ急度吟味致候ニ候得ハ
請人ニ訴候名主五人組ニも申達し是之宗門町方ニ候得ハ
町奉行江も申届老中江書付を以申上候　官中秘策
右切支丹転切支丹類族之面々生死并吴候事
遂ニ七月無脇急度改候義ハ勿論之事ニ候得ハ届
候とも不及之名主ハ不及之留置候ハ向後二季之改吴
書無之候ハ名主宗門改ニ而相届候旦又毎年十月ニ
可指出候宗門改證文も無遅滞宗門改ニ指出可申
右之通候
明和三年丙戌十月十六日　御當家令條

一切支丹宗門御改　公儀ゟ御触之義ハ是迄ハ毎年
ニ無度之事已来ハ毎度暮斗御達ゟ遊候答之趣承知仕候
間右より者指出候改書附之義も六月ハ相止年々十
月九日迄是之通ニ而者指出候

寛政四年　子六月

指上申切支丹宗門手形之事

村々切支丹去辰七月ゟ当巳六月迄御改ニ付
村中百姓水呑寺社門前堂宮社之外山林巌穴
等ニ罷在候之輩ニ御改申候所右宗門之者壱人も無御座
候右村之者共之隠密様日相知候ハヽ何分之曲事ニ可
もて者組頭付候怪敷者見当り候ハヽ捕置早速御注進
可申上候為後日連印指上申候依如件

年号　何村
庄屋印
組頭印

切支丹宗門之義先年ゟ御禁制之処右方之通改申候処御
法度之宗門之者壱人も無之趣村方ゟ手形指出
申候以上

年号
十月十日
郡官古記

文政十三年寅二月六日被仰出
大目附村上大和守ゟ水野出羽守殿御渡諸向ゟ御

違候由ニ而法 埒附之為偽而為見申候書附写
切支丹宗門之儀 従先年雖為御制禁今度於上
方爺太宗門之由ニて異法行ひ候者有之 則致
厳科候 就而ハ右宗門之儀 浦々迄ニ遂御穿鑿候条
銘々寺請所ニ而改 自然疑敷者有之ニおゐてハ其筋ニ
可申出候事 寄而麁略之族於有之は其者仇をなさゝる様ニて於
仰付旨見定およひ為致隠密他所より可及露顕 おひ
てハ其所之者迄も 罪科ニ可被行候
右之趣向々寄々ニて可申達候

十二月

益ハ益（ヤスシ）ノ誤ナラン但シ原本ニモ益ニ作

息距編巻之二

事實第二

享禄三年庚寅夏南番ノ商船九艘豊後ノ府内
來ル其中明門ノ人三官トイヒシヲ具セリ國ノ
主大友左衛門督入道宗麟保首坐トイフ僧ヲシ
テ文字ヲ通ス彼商人等數ノタカラヲ進ラセシ
ウチニ二三尺ハカリナル大器ヲ進ラス其名ヲ
ハ鐵炮トナツケタリ其後天文二十年同國ノ人來リテ石火矢ヲ進ラス
九州記〇按原城紀事引耶蘇
天誅記其事畧同益據本書也
天文十年辛丑秋七月二十七日明國ノ人豊後國

神宮寺ニ來ル其船ニノレルモノ凡二百八十人大友興廢記

今按するに采覧異言の説に據るに大友が記に明國と稱るハ皆ゝ西番歐邏巴地方の海船にして實に明國を謂にあらは其事驗明白なる事往ゝ下に見へたり今考ふるに明の正徳中波尔杜尾尔人始て其國に入てより以来西番の賈胡多く廣東の地に寓す享禄天文の間中國に來る番船も大抵明人を具し来れり想ふに當時夷人廣東より帆を擧け来たる故大友の記に明國より来ると志るせるも此なるへし

波尔杜尾尔西番之來自此國始天文十年辛丑秋七月薹有大海船一隻直至豐後神宮浦其所駕者二百八十人明茅元儀曰西番波羅多伽兒國佛來釋古者傳鳥銃於豐州郎謂之也 佛来釋古者番名フランシスクスサベイリウス彼方教師聲名籍甚者 十二年癸卯秋八月其人駕六大船來其中一隻泊于多禰嶋事見薩州僧南浦集錄是而後來我西鄙歳々不絶 采覧異言

ホルトガル 漢に訳して波尔杜尾尔といひまた波羅多伽兒といひ又蒲麗都家といふむかし我俗ホルトキスともフルトカルともいひまた南蠻といひし即此ヱウロパ

我ガノ下ニ脱字アルベシ下文ニヨルニ俗字ナドニヤ

西南海上は地より此國番貨を海外諸國ニ通
志て洗ひにアジア地方ゴア〇マカーヲ〇マロ
カ等は地にそは人をとゞちまて互市の事を掌
らしむといふ ゴアハ我ガにコワといひマカー ヲは我俗にアマカワといふマロ
カまゝマラカといふ三四 詳なるをゝ下にこ 西洋は番船我國に通ぜし
事此國をかく始とすまゝ天主は法東漸をしる
も此國の通せしによれるえ
按するにホルトカル人初に豊後國に来れる
事ハ天文十年七月也其後薩摩國に来まる者
天文十二年八月也慶長元和は間歳々に来聘

せし五和天川等は人と云 五和ハゴアなり 天川ハアマカワ
哉云なり 皆是此國は人それ居の所より海船
は事を掌まるを兼ゝ使なり慶長十八年乃多
番船は邪蘇の徒を常来る事を禁せられ こまより
さき慶長十四年我國は人アマカワに囗きて 貿易をそるをの三百人此國人はためにをく 殺さる明年其人こゝに来れる哉其 船と共に焼殺されし事ありき 寛永十六
年に及びて番船は来る事を止められ同十七
年五月此國の貢船来る其人を併をて焚かる
正保四年六月此國進貢は船来れ足八月其哉
押還されき哉 ヨセフの説によるにむしめホ ルトカル主妃はイスハニヤは

王の女ニホルトガルの王嗣なくして死しく
其妃父母の國ニ帰る其妃をめるすかりと
聞てホルトガルの臣民追とゝめて國に帰し
納るうくて男子生きく世がつきせ一才にし
て死す又嗣なし先王の弟のエイススの徒と
なりてローマニありしがむかへて嗣とす此
人をとより娶らさきハ嗣子もなし臣民相謀
りて先王の姪女が嗣としイスハニヤの王に
請ふて其国事を治めしむそのゝち彼姪女男
子ヲ生む其子成人の後エイススの法ニ帰し
く国ニ當らんゑを祢がもず其子も又父とそ
としく世がのずる臣民皆勸め進むき共きか
につひ有ローマの師徒共にちゝむるにデウ
ス汝の国が以て汝の先王に何たへ径へにし
かるをそくて治めざらむハしかる庭からに
と云こゝ有あいてやむるを始そして国に菊
きり初イスハニヤの王此国を治めしよりにゝ
至て六十年ホルトカルの王の後位に復し
ぬおきよまて我国ニと先王の好を継て再
ひ禮聘が修めらきし今たさる事七十八九年

前の事あり其王の名トンシユアンクフルと云
なりと云其事即是正保四年六月ニ此国人の
こゝニ来きる
がさして云ゝ貞享二年三月此國の貿船来き
りまたおきを押還さる此後ハ来る事絶えり亦
按するにかの方天主の教我國に入りし事ハ
此國のもしめて通せし時ニフランシスクス
○サベイリウス（漢ニ譯して佛来釋古者と云しをなもちこれあり）と
云師の其船ニ駕して豊後國に来きるに始る
といふ即是天文年間の事なりまさに彼教漢に
入りし事も明の神宗萬暦二十九年の春大西
洋利瑪竇ゟ来りしに始まりと見えたり其萬

暦二十九年ハ本朝慶長六年ニ當れりされバ
彼教此漢ニ入りし事ハ我國ニ入りしよりハ
相後れたる事六十年ニ及べり 西洋紀聞
加西蝋地在伊斯把你亜南其俗亦同 羅馬人説フランシスク
サベリウス原係此国人也為王族師神性朗悟論
辨出倫周流天下随方行化曽過此土遊歴京師西
帰到于臥亜與其弟子永訣示滅即葬金棺内面貌
猶生其将来此禮拝其塔渾身不朽於今尚存其餘
亦説斯人種々奇特不可盡述矣質之和蘭人對曰
教門之説衆口皆然但其館四牆嵌琉璃板就而視
之瞑目趺坐毛髪可数蓋大西孛露国生巴尔娑摩
樹其汁塗屍不傷不朽此樹亦在如徳亜妖人用此
誑惑愚俗耳或云師者那勿
蝋国王族也 采覧異言
カステイリヤ カステイラトモ云漢ニ譯して加
西郎と云あり 我國ニ聞へしカ

ステランと
いふこれらイスハニヤ此東南ニありて共ニこ
れ與國也といふ
按ずるに此国むかしより我ニ通せし事少なし
但し我國ニ始めて天主教を弘めしフランシス
クス○サベイリウースと云しハ此國此人な
りしといふ 西洋紀聞
今按ずるに加西郎ハ即加西蝋にて伊斯把你
亜國王居るところ此地なり與國ニハあらじ源
君義なる説誤れり
天文十二癸卯八月大隅之内西村と云所ニ黒き

大船一艘着岸せ此舟ニ乗組人の形日本ニて不見馴ものともゆへ諸人以の外ニ驚き彼異船中ニ唐人一人有かの者筆談ニて西南蛮より為商賣来るといふ彼異ニ此所人の通詞かくし自是南種子島ニ而て可致商賣由教是ニよりて種子島ニ着岸即其の船之船頭二三人ばかりの鐵炮を持て獣を打翁夕食其後日本ニて鐵炮といふもの不見馴重寳なるものとおもひ此時分ハ其名を重寳と名付かれの蛮夷鐵炮之秘術を日本ニ残し早帰帆せしめよくねんまつニ大隅之国熊野浦といふ所ニ着船せ此時南蛮の鐵砲を作る細工人を乗せ来て其作りやうを教ゆ則泉州堺橋屋又三郎と云もの鐵砲の張やうを習ひ今の堺筒の始り是也其後蛮夷大友の被招彼地へ文禄之頃迄渡海し一切支丹之法廣むとや傳此后の蛮船所々津々ニ而渡海志商賣をなせといへとも密々ニ謀略を以邪宗門を廣めんとの手段てのみをなせり　崎陽雑記

鐵砲記

隅州之南有一嶋去州一十八里名曰種子我祖世

世居爲古來相傳嶋名種子者此嶋雖小其居民庶
而且富譬如播種之下一種子而生生無窮是故名
爲先是天文癸卯秋八月二十五丁酉我西村小浦
有一弋船不知自何國來船客百餘人其形不類其
語不通見者以爲奇怪矣其中有明儒生一人名五
峰者今不詳其姓字時西村主宰有織部丞者頗解
文字偶遇五峰以杖書於沙上云船中之客不知何
國人也何其形之異哉五峰即書云此是西南蠻種
之賈胡也粗雖知君臣之義未知禮貌之在其中是
故其飲也杯飲而不杯其食也手食而不箸徒知嗜

文恐ハ又ナラン

欲之愜其情不知文字之通其理也所謂賈胡到一
處輙止此其種也以其所有易其所無而已非可怪
者矣於是織部丞文書云此去十又三里有一津津
名赤尾木我所由賴之宗子世世所居之地也津口
有數千戶戶富家昌而南商北賈往還如織今雖繫
船於此不若要津之深而且不漣之愈也告之於我
祖父惠時與老父時堯時堯即使扁艇數十拏之至
於二十七日己亥入船於赤尾木津丁期之時津有
忠首坐者日州龍源之徒也欲聞法華一乘之妙寓
止津口終改禪爲法華之徒號曰住乘院殆通經書

揮筆敏捷偶遇五峰以文字通言語五峰亦以為知己之在異邦也所謂同聲相應同氣相求者也賈胡之長有二人一曰牟良叔舍一曰喜利志多佗孟太手攜一物長二三尺其為體也中通外直而以重為質其中雖常通其底要密塞其傍有一穴通火之路也形象無物之可比倫也其為用也入妙藥於其中添以小團鉛先置一小白於岸畔親手一物修其身眇其目而自其一穴放火則莫不立中矣其發也如掣電之光其鳴也如驚雷之轟聞者莫不掩其耳矣置一小白者如射者之棲鵠於侯中之比也此物一

發而銀山可摧鐵壁可穿姦宄之為仇於人之國者觸之則立喪其魄況於麋鹿之禍於苗稼者乎其用於世者不可勝數矣時堯見之以為希世之珍焉始不知其何名亦不詳其為何用既而人名為鐵砲者不知明人之所名乎抑不知我一嶋者之所名乎一日時堯重譯謂二人蠻種曰我非曰能之願學焉蠻種亦重譯答曰君若欲學之我亦罄其蘊奧以告焉時堯曰蘊奧可得聞乎蠻種曰在正心與眇目而已時堯曰正心者先聖之所以教人而我之所以學之也大凡天下之理不從事於斯動靜云為自不能無

差矣公之所謂正心豈復有異手眇目者其明不足
以燭遠如之何而眇其目手鑿種答曰夫物要守約
守約者以博見爲未至矣眇目者非見之不明欲守
其約以致之遠也君其察之時竟喜曰老子之所謂
見小曰明其斯之謂歟是歳重九之節日在辛亥消
取良辰試入妙藥與小團鉛於其中置一小白於百
歩之外放之火則其殆庶幾乎時人始而驚中而恐
而畏之終而翕然亦曰願學時竟不言其價之高而
難及而求鑿種之二鐵砲以爲家珍矣其妙藥之擣
節和合之法令小臣篠川小四郎學之時竟朝唐

淬勤而不已嚮之殆庶者於是百發百中無一失者
矣於此之時紀州根来寺有杉坊某公者不遠千里
欲求我鐵砲時竟感人之求之之深也其心解之曰
昔者徐君好季札劔徐君雖口弗敢言季札心已知
之終解寶劔吾嶋雖褊小何敢愛一物且復我不求
自得喜而不寐十襲秘之而況求而不得豈復快於
心歟我之所好亦人之所好也我豈敢獨私於己而
韞匵而藏諸即遣津田監物丞持以贈其一於杉坊
矣且使之知妙藥之法與放火之道也時竟把玩之
餘使鐵匠教人熟視其形象月鍛季錬新欲製之其

一ノ字誤リ八十ノ字ナラン

形制頗雖似之不知其底之所以塞之其翌年蠻種賈胡復来於我嶋熊野一浦浦名熊野者亦小廬山小天竺之比也賈胡之中幸有一人鐵匠時尭以為天之所授即使金兵衛尉清定者學其底之所塞漸經時月知其巻而藏之於是歳餘而新製數一之鐵砲然後制造其臺之形制與其飾之知鍵鑰者時尭之意不在其臺與其飾在手可用之於行軍之時也於是手家臣之在遐邇者視而效之百發百中者亦不知其幾多矣其後和泉界有橘屋又三郎者商客之徒也寓止我嶋者一二年而學鐵砲者殆熟矣帰旋之後人皆不名而呼曰鐵砲又矣然後畿内之近邦皆傳而習之非翅畿内關西之得而學之而已關東亦然我嘗聞之於故老曰天文壬寅癸卯之交三大船將南遊明國於是畿内以西富家子弟進為高客者殆乎千人檝師篙師之操舟如神者數百人艤於我小嶋既而待天之時解纜齊橈望洋向若不在而狂風掀海怒濤捲雪坤軸亦欲折吁時耶命耶一船檣傾檝摧化烏有去二船漸而達於明國寧波府三船不得衆而回我小嶋翌年再解纜遂南遊之志飽載海貨鸞(蠻)珍將帰我朝大洋之中黒風起不知西

東船遂飄蕩達於東海道伊豆州々人掠取其貨高
客亦失其所船中有我僕臣松下五郎三郎者手携
鐵砲既發而莫不中其鵠矣州人見而奇之窺伺傚
慕有多學之者矣自茲以降闔東八州暨卒土之濵
莫不傳而習之今夫此物行于我朝也盖六十有餘
年矣鶴髪之翁猶有明記之者矣是知響之蠻種二
鐵砲我時堯求之學之一發而聳動於扶桑六十州
且復使鐵匠知製之之道而徧於五畿七道然則鐵
砲之權輿於我種子島也明矣昔者採一種子之生
生無窮之義名我嶋者今以為符其識矣古曰先徳

有善不能昭々於世者後世之過也因而書之南浦集日向僧玄昌所著

天文十三年三月南蠻伴天連初テ薩摩ヘ来ル編年要略

天文二十年辛亥九月朔日大内義隆討れし時明
國此勘合印を失ひて明國と往来止ぬ此時ゟ
南蠻商船来りて耶蘓此宗起れり大友宗麟此宗
に帰せしとなり王代一覧

其後弘治永禄数年之間薩摩肥前肥後豊後豊前
諸所ゟ蛮船渡り来り商賣に事寄セ密に切支丹

ミ邪宗門を勧メ入有り就中豊後大友宗麟深く
邪宗門を信敬し城下臼杵之地ニ蛮船を令滞留領
内ニ切支丹寺を造立有之ニ依て国中此者郷村
卑賤ミ男女ニ至るまで邪教ニ立入る者甚多かりしとぞ
又肥後小西摂津守も邪宗門を信仰せし故彼地
又ハ同国天草此者其外肥前島原村此者多く邪宗
門ニ立入れり是寛永年中天草嶋原此一揆蜂起
せし災殃此根元なり 長崎志
此年八月大内義隆カ家人陶晴賢其君ヲ弑ス陶
モ勅勘ヲ恐レ義隆ノ甥大友新太郎義統カ弟右
京太夫義長ヲ立テヽ大内ノヨツギトス此時明国
勘合ノ印ウセテ日本明国ノ往来ヤミシヨリ 西蕃
天主教傳リシト云
當代ニテ出来シ法ノ末代ニ議スヘキ事ハ耶蘇ノ
事ニ起リテ宗門ト云事ヲ以テ政ノ要トセラル
ヽ事其時ニアタリテハ夷狄ヲ以テ夷狄ヲ治ル
トモ云ヘシ今ニオイテハイカヾアルベキ
南蛮国ヨリキリシタントイウ宗旨ワタツテ府内丹生
嶋ニ一宇ヲ建立シ其宗旨ヲトク清田鎮忠田原
近江守彼宗ニツキ日夜聴聞ス宗麟公御帰アリ

近江守ヲ召レキリシタン宗ノ儀尋タマフ近江ハ九國一ノ辨舌人ナレバキリシタン外道ノ子細ヲサモ面白クコソカタリケリ宗麟公被仰ハムカシ頼朝ノシヲキニモ佛神ヲ鎮トハ第一ニ見ヘタリ大法ナレハソレカシモ佛神ヲ諂仰スサレモヨキ事ハナクシテ世ノワザハイ多シ諸寺諸社ヲ破却センニハ外道ニアラズンバ成ガタシトノタマヒ切支丹ニコソナリタマヒケレヒトヽセ國中ノ社家人義鎮公ヲ調伏仕事アリ此儀御耳ニタチ大キニ御機嫌アシク予カ武運長久ノ祈祷ナトコソモツトモタルベキニサハナクシテ某ヲ調伏スル事手カイノ犬ニ臑ヲクハルヽ道理ナリ事ヲヨクセントテアシクスルトイフハカヤウノ儀ナリ一人モ残サス死罪ニヲコナハルベキヨシ仰出サレケレドモ吉岡宗観トヾメ奉リ御領内ヲハラフ宗麟公ソノ憤不散シテキリシタンニナリ玉フトキコヘシ　大友記一名 九州治亂記

宗観鑑連死去ノ己後貴國御様躰御無道ノゝニ被召扱天罪ニヨツテ近年思召タゝレ候御弓箭御勝利ナキノ儀候方〻ニヲイテ御外聞ヲ失

レ結句貴國ノ御難儀ニマカリナリ候ト他國ヨ
リ批判ノ条数ハ不存候剰秋月邉ヨリハ御無道
ノ條数十ケ条ニ餘リ書立候テ近國振舞候ノ由
申候条サダメテ各モ卒度ハキコシメシヲヨバル
ヘク候ヤ先々初条ニ貴國ノ義ハ無餘義宗徒ノ
御方々ヲ初申老若男女トモニ南蠻宗トヤランニ
ナラセラレ寺社ヲ破却アリ佛神ヲ或ハ川ニ入
或ハ薪トナシ前代未聞ノ御様體ト書ノセイダ
スノ由ニ候是ハ卒度カタモヤ御坐候ハン御心モ
トナク候其子細ハ御分国ニ於テ往古以来近年

マテ他ノ妨ナク寺社領歴々被宛行人給ノ由普
承リ候キ中ニ利口過タル申事ニ候ヘ共源平以
降祈佛神ノ加護先立義理正路弓箭ヲトラレ候
トコソ申傳候既本条ニモ神社佛寺ノ御沙汰ヲ
コソ専ラニコレラノセラレ候ノ条結句佛神ヲ薪ニ
ナサレ候善悪ハ生得愚痴ノ吾ラシキ分則ニヲヨハ
サルマテニ候唯々日本ハ神國ト申候間是非公私
有御信心専順義天道ヲソムカレサルノ様御覺
悟アルヘキ事恐肝要ニ存ルトノ義 同上戸次道雪老中ニ申
遣サル口上
覺書ノ条

第二きり志たん宗は信仰しても上古より末代まで
て書典をも披露せしきり志たん宗は一就悪にて
國家の守護神仏をも破却し諸善無二の堂塔を
崩倒して悪逆無道の最上なれば将軍の運と兵の
勝負も只信力なり太子の得失鏡なる敬神尚佛
にもあり十二の失の中にも一の近不近一の遠不遠これ
れを能く思慮して志給へ昔先祖の崇置ける神
佛をばかりそめにも信仰申されし諸善興隆をいたされず
志て寺社の領地をば取りたる武領なし神社佛
閣を崩して何の有徳哉此は暗君なる故なり不

與天命不可有人不頼神助不可有人助國主猶
可恐民口文士猶可随賤教と云て是を心得るならば永
代國家の為にならば彼のテイウスとやらんは於九州
大友家を上志て妹に万民を思ひすこに施さんと思ふ
て邪魔の法を弘めて密形を誑し申し言語同断
運にて末なる哉

第三に云く彼の根元も不知南蛮男を鑑や宝物にて此世
を引目きらぬキリシタン宗の長老を仰せて京都
公方の勤役なとに代官などをさせたる古忠の家し
者をば南蛮壺の皆を取りせて何の益あらんや

云々

第四条ハ元来大國ハ獣にて　和朝にハ珍敷飼物ニも
なしと云とも何ハ用立共不見朝暮殺生ハみにて世上
の用ニ立ず鶏犬を取て食する事益ニ飼物不成是非
ニ其上無益ニ殺生一度作ニハる哉付起と也今ハ作
ニてハ國中ニ士民共虎ニ餌食と可成ことを案じ候
内裏仙洞も抱懐に存不申往古の賢者ハ為他國
ヲ取亂に其國主ニ美女を進し其外珍物を贈て君
を誑して其後此國と本文ニ見たり彼虎家ニありとも如
其敵國ニ悪思候

日本を指と見志物て渡志候らんと存候

第八云々近代ハ唐人計を採て近くら仕る事実彼
等ハ賣買を業と為て渡海仕る者なれハ賣買ハ道ハ
能々りんを國家ハ好禮義ニ厚薄政道ハ淺深をハ不存
候不弁ニ近習ニならハ或法云遠親勿近他遠遠而近
近國之徴也遠ハ唐近ハ　我國也

永禄八年月日

於當陣所かやうハ中るの由聞ゆる中ニ　斟酌千萬ニ此一冊
此旨無珍所義統指出合點ニ於ニ各ニ教訓ていたしゆる
專一ニ存候美ニ彼曲物ほうぐニ相成候事にて孫豊州ニ儀

曲原本如此ニ作レリ書ノ草書ナルベシ力〇〇モノニ非ラザレバキコエズ

此國なるへし為御存知

一萬田宗慶
戸次鎮連
朽網紹策
戸次紹珊
一萬田宗拶
戸次宗傑
志賀道易
近習各中

義統樣御訓

一休庵主南蠻宗旨の奇特成事きこへ志稀れ成臨
雲和尚を初と志て本禄と此僧達磨ゝ下向あつて書
林寺偈仰おひたゝしき所程なく引替られ如此ゝ時ハ
佛法ハ先面目諸人の猶狂成る休庵主哉と批判有ハ過
去未来ゝ事ハ知らね現在の色相ニおゐてハ些少も不審なし
仁義禮智信の五常是人間乃作法なり此内一ツもかけて
ハ人の鏡と成かたし志よしく南蠻宗ハ已ヶ國ゝハ面白
かるへ志日本紀ニハあらねとも此なりされとも此宗旨
をぬけの御んそうハ別の御用あるへからね是をなゝゝ
ちゝく南蠻船にて寳物めさるへきためなるへし此

智恵ほど弓箭の武略かなひたる方様にて國の乱れ
しづめ難かる事なし
一宗又あにく佛神もいらぬとせば目に見へぬであ
らたも入ましきなれ是をばあるとは覧しる事なれ
手に成りて中も此なき故自由自在是也おかまへて
義統様此半年を過ぎくハ常すれ此治世思ひがけなき
事なるへ志彼等者なかりてハ義統様へ如此中も此
天下にハ無座うれ共皆合點ぬ義統様は皆思慮
なるべし
古簡雑纂所収大友家臣十ヶ条異見
諸方ヨリ邪義ノ僧衆来ル先無邊ト云僧来テ悦

長老ニ法問ヲカケ己カ名ヲ張ントス又如露法師因
果居士ナト云空元ノ邪義トモ来テ家中ノ若侍ニ教
ヘケレバ國ノ風俗大ニ變シテ堂社ヲモ破却シ神モ
佛モ吾身ニアリ堂社ハ皆偽之ト云ケレハ諸國是ヲ
聞大友殿ハ邪蘓ノ宗門ニ成リ給フナト沙汰シテ畔
クモノ多シ 西国太平記 大友来歴
近年如露因果ナト云邪義ノ僧来テ理外ノ説ヲ教ヘ
世ノ理ト云ハ皆非之堂社ハ偽リ物之仙神ハ吾身ニア
リト示セハ堂社ヲ打破リテ野原トシ諸将諫言ヲ入
レハ愚癡ナル理ダテ還テ非ゾト心得且兼引ナキ故

ニ國々ノ大名モ怨ミ憤ルヿトモ出来テ兵亂亦若
ヤキケリ　同上
大友邪義ノ宗門ヲ尊崇シ玉ヒシヨリ理ヲ非トシ非
ヲ理トナシ神佛ハ胸中ニアリ堂社ハ皆偽リナリトテ
薪ニクベ又ハ領知ヲ押領ス是ニ依テ七ヶ國ノ愁訴
蜂ノ如クニ起リ終ニカク自國マテモ亂レケリ　同上
戸次道雪一通ノ封書ヲ豊後執事ノ許ヘ贈ル内意ハ
大友殿ヘ諫言ナリ云々貴國之儀者无餘儀宗徒之御
旁始メ申シ老若男女共ニ天笠宗與哉覧被為成寺
社ヲ破却神佛ヲ或河ニ入或薪ニ成前代未聞ノ御様

體候云々唯々日本者神国ト申候間是非公私有ニ御
信心専不被背順義天道之様可有ニ御覺悟事乍恐
肝要存候　同上
天正十二年云々道雪紹運（高橋主膳兵衛入道紹運）ニ向テ宣フヤ
ウ御邊ハ男子二人ヲ持給ヘリ統虎ヲハ（後ニ立花左近將監宗茂）
兼テノ所望ニ任セテ此入道ニ給ルヘシト理不
盡ニ請給フ紹運思案シ給フハ今九州ノ有様ヲ見ルニ
ニ大友ノ滅亡近ニアリ薩摩ニ嶋津肥前ニ龍造
寺中國ニ毛利是等ノ大敵四方ニアリ其外藩裏ノ
小敵計ルニ遑ナク是ヲ鎮ントスルニ計ナシ近年ニ

至テ宗麟邪法ニ迷倒シテ政道皆邪路ナレハ亡ヒ
給フヘシ吾道雪ト心ヲ一ニシテ九州ヲ治シニ可恐者アラ
ハコソ統虎カ為トイヒ且ハ家ノ為ト思ヒ給ヒケレバ少シ
モ寵愛ノ嫡男ヲ道雪ニ約諾シテ立花ヘ送リ給フ立齋
舊聞記
其後老中吉弘鑑直ヘ打寄終日日州御出馬ノ相
談シサマ〳〵ノ物語アリケルニ吉弘鑑直申サレシハ誠ニ
吾等式申ニクキ事ニテ候ヘ𪜈今度ノ御弓箭ハ御大
事トコソ存候ヘ近年ノ御仕置一ツトシテ能事ナク
御領分六箇國ノ諸人アキハテ居申候ヘハ何ノヨシニテ
ニ一命ヲ捨テカセギ可申ヤ田原紹忍ト云大佞人ヲ
御崇敬ナサレ國家ノ仕置彼ニ被仰付候ヘバ御加恩
諸人ニコヱテ己カ威勢ヲノミタノシミオシアヤマリア
ルコトモ御異見ナトヲ申上候ヘハ御意ヲ背キ身ノナン
ニナラン事ヲ痛ミトカク御意ヲサヘ取請候ヘハ吾
身長久ナリト心得上ヲヘツラヒ下ヲカスメ剰ヘ宗麟
公ヲタフラカシ吉利支丹ノ敵ナリト国々ノ大社カラン
ヲ焼ハラヒ或ハウチクツシ咎ナキ出家社人ヲ殺シ
給フ事昔モ悪行ノタメシ多トイヘトモ加様ノ儀ヲ
終ニウケタマハラズ今度御陣ハ神佛ヲ破却シ

給天罰ニテモ御負可有候立花道雪御ハタモトニ候
ハヽカク悪シキ事ハカリハアルマシケレ圧中國境目
毛利ヲサヘノタメ筑前ヘツカハサレ候此儀宗麟公御
内意ヲ不知人ハ御最ノ由申候ヘトモ武勇道雪ニシト
ラヌ人ハ齋藤鎮實ヲ始メイツレヲ遣ハサレテモ不足
ニハナケレトモ道雪御近所ニ有ルヲ六ケ敷思召被遣
候其ノチ吉岡宗観臼杵越中守生世ノ間ハ又御仕
置モ能カリツレ圧両人死去ノ後田原紹忍ニ仕置被
仰付國家無道ニ取アツカヒ候事當家滅却ノ時節
到來カト存候嶋津中務コモリノ居ケル高城ヲ責ラ

ルヽ間ハ諸軍カセグフリモ可仕候ヘトモ城中難儀
ニ及ビ義久大軍ニテ後詰アルヘシ其時當手六箇
國ノ諸軍ハタ色心モトナシ各吾等ハ唯身ノ耻ヲ
カナシミ討死センヨリ外他ナク候ト申サレケレハ
各此旨ヲ聞仰ノゴトク今度ノ御出馬ハ義統公ヲ
ハシメ奉リ何モ相談可有事ト思召ニヨリサマ〴〵
申上候ヘトモ御兼列ナク候儀マコトニ御運ノ末
ニテモヤ候ハン加様ニ申候ヘハ島津ニヲチテトコ
ソ可存ケレ圧弓箭ノ道ニヲイテハ嶋津ニ負ヘキ
トハユメヽヽ不存サリナカラ宗麟公天理ニソムキ

給フ其トカ争カノガレ給ベキヤ其家亡フベキシルシ
ニハヨロツ亂リカハシク成事ニテ御坐候ト泪ヲナ
カシクヤマレケリ 大友記
今按るに大友宗麟昏愚に志て法人に欺られ邪
教を信し神社を放火し神人罪なき者を殺しぬる
これよりして邪教此毒大八洲に流きよりかく此如き
此悪逆妄神魂を逃るゝ事をゆるん哉社稷淪亡
せしこと宜なりといふべし
宗麟公大隅國ムシカニ御着陣被成國々ノ勢ヲ
待タマフ爰ニ筑後ノ國ノ住人蒲池近江守鑑盛
入道宗雪豊州ノサイソクニ随テ嫡子鑑漣ヲサシ
遣シ其身ハ老體ナレハ遠陣カナヒカタシトテ
出陣セス鑑漣肥後國山鹿ト云所マテ行ケルカ内
々叛逆ノ企テ有ケルガ露顕シタリトテ山鹿ヨリ
引返ス宗雪大キニ怒テ云甲斐ナキ者ノ所存カナ
探題吉利支丹ニナラセラレ神社佛閣ヲ破却マシ
マシ其ノミナラス家老ノ諫メヲモ御用ヒナク萬
法外ノ御仕方ナルニ依國々御幕下ノ侍折ヲウカ
ゞフト見ヘタリ君一日之恩ノ爲ニ百年ノ命ヲ
捨ルモ武士ノ家ニ生ルヽ者ハ名ヲ惜ミニツナキ

命ヲ軽ンス是偏ヘニ世ノ嘲哢ヲハツルナリ去ハ
今度ノ御陣耻ヲ思フ程ノ者誰カ生テ帰ルベキト
思者アルヘキヤ御邊ハ主君ノ厚恩ヲ忘レ先祖
ノ名ヲ失ヒ随分命ヲ助リ世間流浪ノ身トナリ候
ヘトテ白髪ニ甲ヲ戴キ柳川ノ陣ヲ打立シガ其
詞ヲ違ヘス働キ語〈諸〉人ニ越打死シテ盛者必衰ノ
ナヲ残セリ誠ニ勇士ノ義ヲ思フ志程哀ナリシ
事ゾナキ　同上
其比無邊ト云廻國ノ客僧有ケルガ我ハ生所モ
父母モナシ一所不住ノ僧ナリ我ニ不思儀ナル
秘法アリ是ヲ傳受ノ人ヽハ於現世ハ無数ノ患
難ヲ遁レ於来世ハ無量ノ罪障ヲ滅スト披露ア
リケレバ在ヽ所ヽノ男女甚以信仰セリ丑ノ時
ノ受法ト云ケレハ夜中ニ群集スルヿ限ナシ散
銭散米被物禄物席上ニ充満スレトモサヤウノ
物ヲバ塊視メ其儘捨置キ一紙半銭モ曽以私欲
トセズ一郷一村ニ一日二日宛滞留シ夕ベニ来且
ニ過キ更ニ三宿ノ慕ナシ或時安土ノ東石場寺
鵜鶴坊カ所ヘ廻リ来ル三月廿日ノ夜御前ニメ
此沙汰アリケレハ其客僧コソ聞及ビタル者ナ

レ少見セヨト楠長菴ニ被仰ケレハ兼テ鳥鶴坊
ニ同心メ登城アレト使ヲ遣ケレハ則具メ参タ
リ内々此僧忍フ様何様殿中カ或殿守ヘモ被召
上佛法商量ノ上ヲモ御尋アラバ倶舎浄實法相
三論ノ沙汰顕密両宗ノ事浄土ノ厭離穢土欣求
浄土或ハ教外別傳不立文字或孔孟老荘ノ道ヲ
以教化シ奉リ御崇敬ニモ預ランド笑ヲ含ミ居
タル所ニ長菴彼客僧具メ参テ候ト申ケレハ御
廐ニ出給ヒテ立ナカラ無邊トハキヤツカ事カ
ト被仰急度瞞玉ヘハ無邊案ニ相違メソ見エタ

リケル客僧生國ハト問給ヘバ無邊ト答申無邊
ト云所ハ唐土ノ内カ天竺ノ内カト尋サセ給フ
ニ天ニモ非ス地ニモ非ズ又空ニモ非ズト答申
セハ天地ヲ離レテハ何ノ所ニカ安身立命スト
仰セケレバ擬議シテヅ見ヘタリケルニ有情非
情ニ至ルマテ天地ヲ離ル事ハナシ扨ハ汝化生
變化ノ物カイデ試ントテ馬ノ灸ヲスル鐵ヲ赤
ク焼立面上ニ當ントシ給ヘハ是ハ出羽ノ羽黒
山ノ者ナリトフルヒ〳〵ヅ申ケル扨コソ生所ハ
顕レケレ誠ニ此頃弘法大師ノ再誕ヘトテ奇特

ヲ多ク見セタルトノ信長ニモ奇特ヲ見セヨト
責ツメテ宣ヘバワナクヽフルツテ物ヲモ已ニ申シ
得ズカヤウノ賣子恣ニ徘徊サセハ諸人ミタリ
ニ神佛ノ祈リ筋ナキ福ヲ願フヘシ左世ノ費ナ
リ唯信長カ手ニ懸リ其後神變通力ヲ以テ再生
シテ見セヨトテ引ハラセ向ヨリ引刀ニテシツ
カニ截ワラセ給ヘハ神變通力ノ事ハイサ知ズ
弓手馬手ヘ分レタリ此僧一人ヲ害シ給ヒシハ
吁億兆ノ惑ヲ解ニアラスヤ　信長記
元亀元年南蠻船天文之比ゟ永禄十二年迄ハ大

隅之内ニ福田横瀬なといふ所ニ着船して其所ニ
て商賣も致し處ニ蠻夷意ニ應せる湊なし故ニ長崎
ノ湊海底ふかく三方高山ニて雑風凌きし湊也と見
立元亀元初て長崎ニ着船も依て上方諸國ゟ商人假
屋を建商賣も其比ハ此内町ハ大村領主大村民部
入道理專所地之故是理專家来ニ友永對馬といふ
者を差越蠻夷共来ることも此地ニ着岸ニおゐてハ町を
可取立由約束いたし則元亀二ニ町とりをなして國ニ
而ニ分集りしも此者同國を一所ニ置其國之此名を付或
ハ豊後町大村町平戸五嶋町なと名付町ニ此人を定

て今此町年寄此先祖是之(嵜陽雜記)
元亀元年庚午春波爾杜尾爾商舶至肥前深江以
其海深山環便泊舟請大村理専定為互市場創開
市廛理専篤信天教喜如所請(采覧異言 國史○ 深江者長崎舊名)
元亀元年蛮船長崎に来り地勢此ごときを見て此
地を渡りて湊々定よき旨領主理専に乞ひける處
人本来貪欲無道にして邪智深く表には商売に来
れりといへども内心には他方此国土を奪ひ取るべき謀
計にて人に金銀財宝を与へて恩恵を施し或は奇怪
の妖術をなして愚民を惑はせしめ擁をもって切支
丹此邪法をすゝめ導きしかば其宗門に帰依する者も此
甚多く悪執深着し終り神社仏寺一宇も不残破却
し剰へ長崎地内へ切支丹寺数ヶ所造立し猶又市町
郷村共に寺領にせんことを願ふといへども理専取用ひなかりし
故種々此難題を仕かけ巧計を巡せし故理専も是非
なく許容ありて此地を彼徒に与へたり是より彼蛮
当地領主の如く仕置等をも取捌き恣に横行し
暴悪無道此仕業年月を経るに随ひ甚勇猛なり(長崎志)
南蛮人天文之頃日本へ渡海して方々の津々に令着岸
為商売渡といへども密々に謀を以邪宗門一方廣手便此

ミを成し元亀元年か長崎ニ往来し已か心此まゝに
切支丹寺を建て居所を義て族取り立長崎中従て
ま宗門ニ引入る其比まてハ異國人他國へ往還自由
ニて吉利支丹ども方ゝま徘徊せて（嵜陽雑記）
舊記ニ大友宗麟初ヨリ数年我領地ニ蠻船ヲ相
着處國中兵亂ノ事有テ暫ク交易ヲ成サシメ難
キ故大村理專ハ大友ノ幕下ナレハ宗麟方ヨリ
大村ニ云送ルハ長崎ハ船繫リ好キ湊ナレハ入
船スベシト告知スル故ニ此津着船セリト云ゝ
評曰蠻船九州諸處ま入船シ此地ノ形勢ヲ考見
テ長崎ヲ渡リノ湊ニ定タル事諸ノ舊記ニ見エ
タリ然ルニ最初ヨリ豊後ノ地ニ数年彼徒ヲ相
着ケ宗麟深ク耶教ヲ尊信シ其以後ニ至リ宗麟
方ヨリ差圖有テ長崎湊ニ着船セシト云事甚未
審事也（長崎志）
又説ニ蠻人共耶教ヲ勸テ長崎ヲ切支丹寺領ト
成セシ事長崎甚五衛門龍造寺ノ大村家ト合戦
有シ時助力セントテ元亀元年軍器ヲ揃フベキ
為ニ長崎ノ地ヲ蠻人方ニ質物ニ出シ銀ヲ借用
シタル故甚左衛門退去以後大村家有馬家ト相

談シテ借銀ノ代リニ長崎ノ地ヲ南蠻寺領ニ渡セリ評曰南蠻人元ヨリ他方ノ國土ヲ奪取ルベキ巧計ニテ彼國ヨリ珍器ノ物或ハ金銀財寶ヲ持来恩恵ヲ施シ種〻妖術ヲ成シテ愚民ヲ驚動感伏セシメ九州四國ハ不及云南海山陽ノ諸道畿内ニ至ル迄邪教遍満セシ處ニ秀吉公彼徒カ蠻謀ヲ明察在シテ邪徒之輩悉ク本國ニ追返サシメ切支丹宗門御制禁嚴厲ナリシ故於今諸國山海ノ邊隅ニ至ル迄餘殃全ク断滅セリ然ルニ元亀元年ニハ甚左衛門退去セシ以後ニテ則此地ハ

大村家ニ被給ケル所ナルヲ前年甚左衛門蠻人ノ銀ヲ借用シタル其代リトシテ長崎地ヲ輙ク彼徒寺領ニ渡セシト云事其旨甚以信用シカタシ其頃ハ諸國九州共ニ大ニ乱レシ時節十二代迄相續シ長崎氏遂ニ他ノ幕下ニ屬セサリシト有レハ是相應ノ智謀勇略モ有テ甲冑弓箭ノ類モ事足リヌベキニ凡軍陣ノ道安危存亡ヲ天運ニ任セ命ヲ塵芥ヨリモ軽ク義ヲ金鐵ヨリモ重クシテ武名ヲ後代ニ輝カシ郡國ヲ討従ヘテ子孫ノ後栄ヲ期スベキ事ナルニ甚左衛門如何ナ

ル心底ニヤ他家ノ爲加勢ト武器ヲ調ントテ我領地ヲ質物ト爲シ畜獸ニ齊シキ蠻賊ノ銀ヲ借用シ其返却叶サル時ハ我領地ヲ蠻人ニ渡シテ進退ノ度ヲ失フニ至ルヘキ事也豈其理有シヤ是記スル者其傳聞ノ當否ヲ辨明セス謾ニ虚誕ノ鄙説ヲ傳ル者ト見ヘタリ　同上

南蠻船ノ大隅國種子嶋ヘ來リシハ天文十二年八月ニ昉リテ其後弘治永禄數年ノ間薩摩肥後肥前豊後豊前諸所ヘ來船シ元亀二年夏遂ニ商館ヲ構ヘタリ　外蕃通書

高槻城主高山右近だいうす門徒ニ候信長公被廻ニ依案伴天連を被召寄此時高山ニ忠節仕候様ニ一段才覚左候ハヽ伴天連門家何方ニ建候共不苦之由請不申上候ハヽ宗門断可被成候而防絶之趣被仰出則伴天連ニ請申候佐久間右衛門羽柴筑前宮内卿法印大津傳十郎同道して高槻へ被越色々教訓仕候勿論高山人質雉被出置山鳥を殺大鳥城抜佛法可繁昌之旨相存知此上ハ高槻之城進上申候高山ハ伴天連沙彌之由ニ而請し候而祝着不斜　信長記 天正六年戊寅十一月

天正六年高槻ノ城主高山右近後號南坊年久シク邪

蘓宗門ニ歸依スルノ儀聞召及バレ彼宗師伴天連ヲ被召出仰出サレ候ハ此時高山味方ニ参リ御忠節仕様々才覺致スヘク候左候ハヽ向後伴天連門徒相違ナク立置ルベク候若御請不仕候ハヽ彼門徒永ク以テ御斷絶ナサルヘキノ由委細被仰付候處ニ伴天連御請仕リ佐久間右衛門尉羽柴筑前守宮内卿法印大津傳十郎同道セシメ高槻ノ城ヘ罷越種々教訓申ス處高山事左荒木方ヘ人質出シ置候ト云ヘ𪜈小事ヲ捨大事ヲ扶ルヿニ候間御味方ニ参リ御忠節可仕由申上

則高槻ノ城進上申候大臣家御悦喜ナサレ伴天連被召出御褒美トシテ黄金三百枚小袖十重被下之 惣見記

天正七年筑前太宰府炎上吉利支丹焼之 編年要略

天正八年人告利家公曰頃年有異人来七尾僦宿能禱祠天地所其言巧發素無事子匿其年及所生長常自戯言百歳國人愈信争事之饋遺之不幾而餘金銀衣食誠不治産業而饒給者歟言者以為公欣然庶幾遇之公恚曰是妖怪國賊也令人斬之非真實發道心族果耶蘓之徒也 前田創業記

天正八年庚辰閏三月十六日ヨリ菅屋九右衛門
堀久太郎長谷川竹三人御奉行トシテ被仰付安
土御搆ノ南新道ノ北ニ江ヲホラセ深田ヲ埋サ
セ伴天連ノ輩ニ御屋敷是ヲ被下候 信長記 惣見記
是歳ノ夏諳厄利亜商船始テ肥前國平戸ニ来ル
是ヨリ毎年渡海シテ交易絶ルヿナシ 長崎夜話草
今按するに通信事略に慶長十八年始て書を奉り請
返出をなされしとあるハ書を奉りし始をいへる
其前ハ諳虜漸く強盛なれバ日本へ来りしハ天文八
年に始まる事本書此説其実をのせたる者なるべし

天正九年辛巳二月二十三日きりしたん国より黒坊主参り
し年比齢廿六七とおほへ惣比身黒き事牛のごとく彼男健やかに
器量也強力なる人に勝さるべし伴天連召列参り禮申上て
誠以て威光古今不及承三國乃名物か様に珎奇之者尤ある
たく拝覧仕る也 信長記
是歳十月廿日ヨリ伴天連黨北南ニ二通リ新町
鳥打ヘ取續キ立サセラレ候ハン由ニテ御小姓
衆御馬廻衆ヘ仰付ラレ足入沼ヲ埋サセラレ町
屋敷築カセラレ御普請有之 信長記 總見記
或書曰織田信長公御前ニテ近年長崎ニ南蠻國

ヨリウルカンバテレンント云奇妙ノ異國人渡リ來レル由言上セシ者有シニ信長公急キ其者ヲ召寄スベシト彼異人ヲ召レシニ日ヲ經テ江州安土ニ参着シ彼異人種々ノ寶物ヲ獻上シ信長公ノ御前ニ罷リ出ル汝何ノ為ニ日本ニ來ルヤト御尋有シニ彼者佛法ヲ弘メン為ニ渡リ来レル由重テ御召有ベシト城下妙法寺ニ差置ル其後大老昵近衆ヲ召レ御評議有シニ一人ノ儒者刑部正則ト云者進ミ出彼者ノ體相誠ニ戎狄ノ輩ニテ人倫ノ正道ヲ知タル者ニハ非ルベシ後年如何ナル災ヲ成ン事モ計リ難キ者ナレハ速ニ本國ニ被追返可然旨言上ス

今按ルニ五月雨鈔ニ蛮人永禄十一年九月ニ信長ニ謁シ譯詞を以其來るよしを問へハ日本に佛道を弘めん為といへり実は彼國より我國を奪はん為に渡せしなり信長異拵なるをめでゝ其道を弘め見たやとあり（本書ニ刑部正則ト云者）是を儒臣文殺院法橋道仙諫めしとあり（とは文殺院同人なりや異人なりや未考へ）信長安土城を築きしハ天正四年なれバ本書に蛮人安土にありしとあるハ謬なり南蛮寺初永禄中と號せしなれハ五月雨鈔の説ぞ実を

ねうろといふ庵し

然ルニ信長公暫ク御思案有テ仰出サル、ハ夫昔年百濟國ヨリ佛像經巻ヲ渡セシヨリ以來今以テ佛法繁昌セリ若又最上ノ佛法ニテモ可有ヤト家臣ニ仰テ洛陽四條坊門通ニ四町四方ノ地ヲ與ヘ一寺ヲ造立セシメ寺領五千貫ヲ與侍者等ハ本國ヨリ可呼寄旨被仰付仍テ長崎往來ノ蠻船本國ニ通達セシニヤ翌年フラテンバテレンケリコリヤリイス二人ヲ始メ數人渡來リ猶又獻上物數ヲ盡シ捧ゲヽリ信長公御目見被仰付彼寺ニ在住セシメラル是ヲ南蠻寺ト称ス斯テ寺中ニ於テ教論說法等ノ事ハ無之洛中洛外ノ諸人或野山ニ行倒レタル乞食非人難病ノ者癈疾ノ者等ヲ寺中ニ集メ衣類倉〔食〕物ヲ與ヘ其病症ニ依テ内科外科ノ藥方ヲ用悉ク平愈セシメ又貧窮ノ者ヲ寺中ニ置キ妻子等迄養育シケレバ其慈悲厚恩ヲ感ズル者幾千萬ト云数ヲ知ラズ彼療養ノ内ニ蠻人等語リケルハ汝等難病貧苦ヲ受ルハ生得ノ因果ニ依レリ我南蠻国ノ人民ハ天帝ノ教ヲ守ル故病苦貧窮ノ者一人モ無之

汝ヲ我教ヲ信用セバ現世後世共ニ安穏快樂ヲ得ベシト怪シキ宗門ノ唱言ナトヲ敎ヱ奇異ノ法術ヲ見セシムル故愚痴蒙昧ノ者共皆其法ニ帰服スル事甚深重ナリ年月ヲ経テ三好長慶松永久秀高山友祥ヲ初大名旗本ノ歷々地頭代官其以下畿内諸國ノ人民彼宗門ニ傾キナヒク者際限ナカリケレハ信長公此事聞召及ハレ惣而佛法ヲ尊信スル檀家ノ者ハ謝儀禮物ヲ捧テ其教ヲ授カル習ナルニ彼徒ハ檀家ニ財物ヲ與テ法ヲ勸ムルハ心得難キ事也其上最初日本ニ渡来ルハ高賣ノ為ナル由ナレハ金銀利倍ヲ貪リ求ムベキ事ナルニ病苦ノ者ヲ療養シテ許多ノ費ヲ厭ハス遠海ヲ凌キ来リテ無益ノ慈悲ヲ施スハ是只事ニ非ス必定己カ恩恵ヲ以テ此國ノ人民ヲ味方ニ懐ケ置遂ニハ我國土ヲ奪ヒ取ヘキ謀計ナルヘシ先年刑部正則カ詞少モ違ハズトテ大ニ後悔有テ彼寺ヲ破却シ蠻僧共ヲ罪科ニ行ハント甚忿激ノ御氣色成シカ𪜈諸國騷乱ノ時節故暫ク差置ル折節其砌秀吉公毛利輝元ト對陣ノ時明智日向守後詰被仰付信長公ハ京都本能寺ニ

御出馬ノ處明智逆心ヲ起シ信長ヲ討奉ル秀吉
公程ナク明智ヲ滅シ給ヒ其事空シクナリシト
也 長崎志
蛮夷長崎に来る事元亀元年より天正十五年迄南蛮人
已り僧に邪法を執り大村には金銀諸色を謝禮し町中此
も此にハ吏にに應し金銀財宝を其好に随ひ充行ひ田へ
親に深くかれを尊敬し其にあて恭かひ是によつて邪
蘇の法地下ハ中に及ハず諸國より来るも此を厚徳を施
すなおのつからか此宗門に入神社佛寺を焼耶蘇宗門
に者を連美善を結構し僧侶伴て連を置通るを諸氏

により耶蘇義之地となる事十八年此写あり 崎陽雜記
天正十二年甲申春豐後國遣使往報其聘大使遇
疾死于彼國義聞之西人説爾時大使携其幼子來
邏馬國以爲其徒大使之墓在于山中於今猶存輙
出懷中冊子所畫其像者以示之考其使人名氏曰
植田玄佐原係美濃國齋藤氏族者也 采覽異言
十五年丁亥春豐闕白西巡之日怒彼教師無禮驅
之出境然如其通市羈縻不絕置場如舊始自蕃舶
來貪者逐其利愚者歸其教愚之與貪其弊日甚國
初以來嚴設厲禁而竟格不行激成其亂及嶋賊既

平後諸蕃貢市一切沮之其冒禁陥戮者通于前後
凢二十八萬人禍亦慘矣 同上波爾杜尾尓條○此國之人我俗呼為南蠻者其來多取道呂宋也其船呼為黒船者塗之以蕃瀝青故耳
天正十五丁亥年秀吉公嶋津征伐ノ為ニ九州エ
發向ノ時筑前博多ニ在留ノ節長崎湊之頭分ノ
者共御機嫌伺トシテ出ル處老中ニ無禮有リ且
先年南蠻國ヨリ渡リシ切支丹ノ邪宗ヲ信用成
セシ罪ニ依リ藤堂佐渡守ヲ遣サレ條目ヲ以被
仰渡頭人ノ分不残追放ナシ南蠻船ハ即時ニ追
歸サル 瓊浦通

天正十五丁亥年秀吉公筑前御滯留ノ時長崎頭
人共推参シテ數人南蠻人邪法ヲ授ケ神社佛閣
ヲ破却シタル事ヲ御聞ニ達シタリ藤堂佐渡守
ヲ長崎ニ被差越伴天連共早ミ可令歸國旨御條
目ヲ以テ被仰渡翌十六戊子年長崎ヲ御料所ニ
被仰付為御代官鍋島飛彈守ニ當所ヲ御預ケ置
ル旨御條目ヲ以テ被仰出之 長崎志
佐々成政ハ武勇ノ聞エアル者ナレ𪜈文ニ愚ニシテ
國ヲ治ノ器量ナク一國平均ノ政道ナスヿ不能
トテ殿下大ニ怒リ給ヒ國守ノ器ナキ者ニハ國ヲ

與フベカラズ其上南蠻ノ邪法ヲ行フトイヘバ
旁以大國ヲ守ラシムヘカラズトテ天正十六四
月上旬ニ佐々ヲ召上セ終ニ誅シ給ヒケリ　立齋舊聞
記

長崎之儀元亀元年より天正十五年之頃長崎中都而邪蘇
宗門ニ而御依敬之者を始め蛮夷之地伴天連をも是に出
とく取持故秀吉公天正十五年九州ニ御出陣さつま義久
を志つめ給ひ御帰陣之砌筑前箱崎へ志ばらく御逗留
あつて其節彼伴天連長崎より罷ニ献上を支度し登
城御供之内邪蘇宗門傾候事不届之由にて遂御吟
味有之人ニ切死罷依之伴天連日本渡海之義向後停止
被仰出早速ニ指向長崎之儀日域之正道を取失ひ伴天
連ニ志たがひ剣地欣職之者長崎を切支丹ニ給を指出す
不届ニ付依之御料ニ被取上為上使藤堂佐渡守被指下又
翌年寺沢志摩守藤堂佐渡守両人へ被差下長崎見分あ
り肥前領主鍋島飛騨守へ御預ケ天正十六年より同十
九年ニ至飛騨守長崎を預り諸事支配之義ニ文禄元年
重て為奉行寺沢志摩守ニ被為下此時より長崎奉行
といふ事有　崎陽雜記

其後秀吉公諸臣ヲ集メ被仰出ハ去ル弘安年中

蒙古韃子軍船数千艘ヲ催シ九州迄襲ヒ来ルト云ヘ𪜈諸所ノ神社各霊験有テ神風大ニ起リ彼軍船悉ク沈溺シ兵卒各滅亡セリ然レハ異国ヲ恐ルヽニハ足ラサレ𪜈此國ノ人民正道ヲ捨テ神佛ヲ破却シ邪法ヲ信用スル者ナラハ後年必國ノ騒乱ト成ヘキ事ナレハ切支丹ノ邪法急度制禁スヘキ旨ニテ増田右衛門尉ニ軍兵千餘人ヲ被差添京都四條坊門ニ被差遣伴天連共搦捕テ長崎ニ送リ南蛮寺ヲ焼拂ヒ五畿内ヲ初諸國ニ於テ邪宗門ニ傾キシ者共一々改宗セシメ若難渋スル者アラハ急度死罪ニ行ハルヘキ旨被仰出之（長崎志）

文禄三年甲午京大坂ニ隠匿居たる伴天連六人黨類二千餘人搦捕て長崎ニ送リ斬罪せらる（同上）

文禄之頃先是三十年前南蛮耶蘇入貢託于商胡以弘邪法文禄年中秀吉怒其惑民乃捕伴天連六人伴類二十餘人渡於京都大坂送肥前長崎皆磔之且將停市舶然依長崎民所許之（豊臣秀吉譜）

慶長元年十二月十五日今日タイウス門ト二十四人車乗ニテ一條辻引渡也従夫唐ノ辻ニテ成敗

豊前豊後筑前筑後肥前肥後六ヶ國ノ守護職従
四位下侍従大友修理太夫藤原義統ハ數代九州
ノ探題トシ十九代迄豊後國ニ居住シ六ヶ國ノ
大小名悉ク大友ノ幕下ナリシニ父宗麟カ代ニ
至テ耶蘇宗門ヲ尊ミ神社佛閣ヲ破却シ悪逆ヲ
盡ス故萬民踈ミ歎キ幕下ノ輩大形背キ國中大
ニ擾亂シテ領地ヲ被奪剰子息義統カ代ニ至リ
秀吉公ノ下知ニ依テ朝鮮國ニ發向セシ處臆病
ノ働キ軍功更ニ無リシ故ニ累代ノ舊封ヲ悉ク

没収セラル
問曰むてきんハ日本ニ宗旨ニ對してハ何程あきるゝう
や答曰宗旨ニ對しあきるゝハさて置ぬ日本此大敵にて
ミせきり志たん此法を不知國ニヘ廣め初て彼國ニをと
らさる所更ておしとらや淵宗いすまんぞや此びすまん
まや呉何ぶるとかるかやうふ此大國を十二ヶ國法を衍（街行）ひひろ
けて取しあり るきんなとも初一町四方を銀子拾貫匁く
年貢を出しかりとて二階三階ヲ太なる家を作りおし黒
船の荷物を運ひ入珍らしき物共をみんせ又出し立市をた
志やふまい此便を快くし所此吏務へ捧物を夥しくか

なさせ其下にある有司并近習の人々まて浅からぬ音信を
ひそかなるこそ能きやうなれ扨侍る此事外上手世にあら
一町の衣へ見物なとする件の人来りたりしかハ上戸にハうち
んた。ふたつ酒。ろう香。を拵ぶ。このおんちから。下戸にハうす
ていろいろうる。かるめいる。あるへい糖。こんへい糖。なとを
もてなし我家の内へ引入る事たふからましくて
有人曰此家の根を絶葉をからす根になる制法もあら
んの根離くハ寛永の制禁五ヶ国と秀吉公の時代
まなしのハそ種ハきりしたんの法種絶果んも此を

太閤記

前に云耶蘇宗の道師を日本へ来たらしめる趣意信長殿
御の今川を討て威勢増長志江州の佐々木一族を攻落
せし永禄年中波爾杜瓦爾の大船難波の津へ渡来
て交易をせんとせる有諸国合戦止時なく交易せるもの
もなくむなしく本国へ帰帆して㸔と申せしに彼の王
の曰日本未治道の全を得す此節有国同士の合
戦せるといふ事毎とへは一家の内にて争奕を構負せ
るに似たり構ふる益なく負れは国民を損亡せる事不便
の次第なりとて諸大臣に命しておく国の布施をせんとす忽
治平の国となりぬ爰にしたある时に国民を救の事ゝ不

あらす金銀多き國なれハ大益をはかるの益あるへし
とて四十二ヶ國ニ此租税を以て此入用ニ充て道法三人を選
て日本長崎へ渡せる此頃日本戦国なれハ誰拒くもなく
なく祀宗門ニ天主教を弘法す故ニ日を追月を追信
仰せるも此多く其沙汰を学傳て他國よりも来て其教
就学も此多し又波尓杜尾尓國より才あるも此能ある者
藝ある者ハ云ニ不及金銀布帛珍器珍産及諸穀諸藥
此種子等迄船送り名醫渡り来て難病を治して本復せ
しむるも此多し此ゆへ國々へ学へ難病人夥しく群集し治を乞
ふも此快事となさるなし剰貧人ニは金銀を与ふる故悪

く民俗信彼ニ帰し京大坂及ひ諸城下諸場港津浦ニ松
前迄も切支丹寺を建立して信仰せしむ此年歴僅ニ二
十餘年此間なり此事盛ニおこなはれハ危き事なるへきを
秀吉公此天生此聡明を以此國害を見破り切支丹宗門
を停止して悪志若拒者此あらハ厳科ニ處せらるへき旨命
せられ永く日本此禍を除ゆまひしも天晴英雄と云
へし

西洋商船原始

圖書局文庫

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan